

『ダンテ』は、またエミール、モーローとの合作となつてゐるが、モーローは單に史的考證の方面を手傳つたのである。佛文を英譯したのはアーギングの作の一人、ローレンス、アーギング。書割は三人の畫工の分擔。

此の芝居が出るに逸早く其の筋書に註を加へたやうなものを刷つて賣り出した本屋がある。劇場内でも賣つてゐる。筋書と言つてもあまり纏まつたものでは無く、寧ろ作中の事實の考證と作の趣意とを吹聴したやうなものだ。是れに依ると、サルドゥが此の脚本の趣意は史上のダンテを描くのでは無い即ち史劇ではなくしてダンテの精神若しくは中世伊太利の精神界を之れに標現したものである。シムボリックアイデアを味はなければ、此の芝居は分からのぬこの辯解と見てよい。是れはサルドゥ自らの言だ。

文藝界のシムボリズムといふことは、現今一面の潮流たるには相違ない。英國で言へば佛蘭西通のシモンズ、ニイチエ好のシヨール。同じく愛蘭士詩人のイーツなどが専ら唱へて、大陸思潮の一例を吸いせんとしてゐる。日本の最近も同じであらう。併しながら精しく言へば純粹の標現主義といふものが、深く美の條件に合せんには、更に其の上に何物をか要することを證しつつあるのが、今日の實勢かと思はれる。即ち文藝が美術として成功すると否とは、其が眞理を標現すると否とに非ずして、其の外にあること猶ほ現實を寫すと否とが美の最後の判断に非ざるが如くである。若し誤つて美の源を現實の摸寫に尋ねたら、寫實主義は亡ぶであらう。美の源を眞理の標現にのみ求むるのも、同じく理想主義を亡ばす所以である。なほ標現主義存立の所以については、今少し論があれど後に廻して、

この『ダンテ』のみづから標現主義と榜示するのを幸ひ、此の點から、アーピング劇の如何に成敗せしかを觀やう。序ながら、此の劇が觀察者に重大の意義を持つてゐる點は數多ある。第一、右の如く標現美術の恰好な試験場として。第二、アーピングが去年の『ファウスト』といひ今年此の芝居といひ引きつゞいて二度まで標現的のものを場の上に上てし劇界に於ける此の種の傾向の頂點を示せるものとして。第三、純然たる劇として、如何なる程度まで書割道具立を利用し得るかといふ問題に、世界の演劇史上空前の事例を示したものととして。

## (二)

さて其の芝居の組み立、逐場の見物記及び結論は次項の如し

ダンテ劇といへば誰れしも先づ彼れが一代の大作『神曲』と彼れみづからの傳と、どちらが種かと思ふ。此劇は雙方から取つた者である。『神曲』を芝居にするといへば、在來の例から見ると、其のうちの一節を材にして布衍する中にも、千古絶好の詩題といふ彼のバオロ。フランチェスカの必中談では無いかと思ふ。たしかにバオロ。フランチェスカは劇中のものとなつてゐる。否、凡そ如何なる人がダンテに指を染めても、既に序してダンテといふ以上は、バオロ。フランチェスカの名とピアトリスの名とは必ず其の彩色の中から逸すべからざるものであらう。併しバオロ。フランチェスカは此の芝居では只一つの挿話たるに過ぎない。又ダンテの傳といへば、自傳の『新生涯』とピアトリスと戀の神聖と、是れが芝居の大筋かとも察せられる。ピアトリスの名は勿論つかつてある。けれども劇中のダンテ傳は、それでは無い。さらばポツカ

チオ以下、後世の全傳を持つて來るかといふに、さうでも無い。斯くの如くして、サルドッの『ダンテ』は、普通の路を離れた。而して傳の方面は専ら作者の空想から組み立てた。『神曲』は其の全體の形式作者みづからは全體の精神。と熟語するかも知れない。就中地獄の巻の趣きを寫した要するに『神曲』中から地獄巡りを取り、作者の頭の中から傳を取り出して結合したのが此の劇である。

作者サルドッは何ゆゑに斯かる奇道を選んだであらうか。曰はく標現的高大を其の作中に求めんとしたからである。是れは作者みづからの説明で知られる。

前言ツた説明書によれば、作者が地獄巡りの幻想を寫した趣意は、これによつてダンテが精神上の煩悶すなはち現世の罪惡過誤に倦みて、人生たゞ善を愛するに至極することを悟るに至れる所以を標現

せんとしたものの。またダンテ其の人としては、當時に於ける政教の混亂、法王の専恣等を悪んで、遙かに近世の自由思想を豫表した點に標現の意義を求めたものである。言ひかへれば、ダンテ傳に自由といふ一思想の権化を見、神曲に人世到頭至善に歸すこの意を見んがために、サルドッは斯くの如き結構を擇んだ。「史上のダンテを描くにあらずして精神のダンテを描く也」とは作者の宣言である。意氣や稱すべしでは無いか。

さりながら好漢惜しむらくは月を描いて影を成さず、松を描いて風來らず、如上の意義に於ける標現劇『ダンテ』は、詩とならなかつた。無感興であつた。少なくとも吾人の感納性に對しては、標現的高大の意義から來る美快感は無であつた。當に吾人のみならず、世評も大抵は此の點に於いて一致してゐる。

されば此の感納的事實を發足點として、少許の推理をこゝろ見やうか。

何故に此の一大標現美術は無感興であつたか、概般的に標現美術そのものに失敗の原因があるのでは無いか。但しは特殊にサルド一家の此の場合に限れる缺點であつたか。

概論はこゝに省く。何とならば其の結論次第で、文藝の様式に制限を立てる譯となる。是れ批評學上の大事であるから。

特殊論をなさんが爲めに、標現といふ語の意義を狭めて置く、即ち假りにこゝに例現といふ對照語を用ひて是れを彼から引去らう。

例現といひ標現といふ所詮、現の一字は免かれぬ。こゝでは或る「理」が美術と現するの謂ひであらう。而して其の現する「材」と現せらるる「理」との關係によつて、例現と標現との區別を立てる。

例現とは理と材とが量差の關係であること、標現とは是れが類差の關係であること。量差とは一方が普遍のもので、他方が特殊のものといふだけの差、類差とは其の上に種類の懸け離れてゐる差。前者は理と其の實例といつたやうなもの、後者は理と其の標牌といつたやうなものである。

例現美術にあつては、作中の事象に觸れると共に、人をして遙かに其の奥に貫ける廣汎の理を思ふを禁せざらしむる底の美術であらう。併し此の場合の特色は、斯くの如くして思ふ所の理そのものが、事象と離れたる如くにして、尙ほ離れず、妙に相混じて、知情の調和的満足を成し、以て其の美術に一種幽妙の光澤を傳するにある。一派の理想派美學から言つたら、美の本意は是れに盡さることも見やう。吾人はたゞ之れを以て美の一と見る。美の全とはなさぬ。

標現美術の特色は、其の標せられる理と、標象そのものと、單に譬喩的  
 寓意的關係で繋がつてゐる點にあること、前言つた通り而して譬喩  
 的關係の成立する條件の種々なることは、修辭の場合に見ても明か  
 であるが、中心は二つのものが密に關聯してはゐれど、而かも確かに  
 異なつてゐると思はれる所に存する、即ち標現的作品に對する時も、  
 其の事象よりして遙かに其の奥の理に思ひ及ぼすをば禁じ得ない。  
 是れは例現美術の場合と同じであるが、思ひ及ぶ次第が違ふ。思ひ  
 及びはするが、而かも明かに別なものであるといふ念が、何處か意識  
 の隅に残る。是れが標現美術の特性であらう。若し全く此の念の  
 忘却せらるゝ刹那があるとするれば、其の時は併せて標象そのものを  
 も忘れて、眼は空中の理をのみ辿つてゐやう。  
 此の特性からして、標現美術には種々の要件を生ずる。

第一は其の標せられる理が、そのものみづから最も現人生に切ない言  
 ひかへれば、趣味深いものでなくてはならぬ。其の理の提起のみで  
 も、早や十分に雑多の過去現在の吾等が經驗の感想を撼搖するもの  
 でなくてはならぬ。さなくば、其理は只空なる託言冷かなる抽象名  
 詞に過ぎざるの結果となるから。而して此の點から作の生命たる  
 哲理に對する情味が發する。  
 第二には標象すなはち作中の事象は何所までも寓意標たるの性を  
 失はぬと共に、最も適切に其の寓する理を提起するものでなくては  
 ならぬ。寓意標たるの性を失ふのは、厭はぬが、さすれば例現美術  
 に近よるまでの事である。適切といふことが缺けたらば、其の美術  
 は説明を待つて僅かに分かるものとなるから。而して作者の技巧  
 に對する嘆稱の興味は、此の適切といふ事から發する。(學友平野柏)

蔭氏は藝に「讀賣新聞」日曜附録に善美關係論を掲げられた中に技巧  
 嘆稱の興味之美たり得ることを説いて吾人が舊文中に之れを否定  
 した箇所あることを示された。今は記憶せぬがさうであつたかも  
 知れぬ、寧ろ理想派美學に重きを置いた一項は、自然にさやうの傾向  
 を持つてゐた。今日では此の點柏蔭氏の論に異議無し。善美合一  
 論はおのづから別である。之れは他日を期する。  
 此等を標現美術の重なる要件とすれば、サルドッの標現劇「ダンテ」は  
 兩件ともに之れを逸してゐる。  
 第一に作の生命たる所標の哲理が枯瘦である、空漠に失する。曰は  
 く自由が暴力に苦しむ曰はく神意に參して人生善を愛するに止ま  
 るを知る。  
 自由が暴力に苦しむといふことは、政治宗教の狀勢の一變した近世

殊に自由といふことの著るく發達した近世では、人々念頭の最大事  
 とはならなくなつた。之れに代つて近世の人心を支配するものは  
 理と情との乖背といひ社會と個人との衝突といひ、自と他との矛盾  
 といふが如き諸概念であらう。此等も何れの點にか自由を暴力と  
 の關係に觸れないことは無いが、同感の燒點が變遷してゐる。觀望點  
 が變つてゐる。されば自由を描いて同感を得んとならば、是非とも  
 標象その者の感興に多分を歸するの例現美術に行くべきであらう。  
 殊に中世伊太利の歴史を背景として、史上のダンテを取り、史上の事  
 實を髣髴するに如くは無い。即ち普遍化する自由をダンテに標現  
 するに非ずして、中世の自由、ダンテの自由を其のまゝ描くのである。  
 而して後其の奥に普遍なる自由が不即不離に現はれたらば、作者の  
 成功たるや勿論。

神意に參して人世善を好むに止まるを知る是れは空漠に失して我等の感想に切ならざるものとなつた。但し此の點は原作『神曲』の上から一言する必要がある。何とならば是れやがて『神曲』の精神であると共に『神曲』は萬世にわたりて最も高尚なる人の心に訴ふるの詩とたゞへられてゐるから。

『神曲』の趣味の中心は何であらうか。凡そ世界の典籍中純文學の産物で累世の評釋研究を重ねること『神曲』の如きは他に類無しといふ併し其の中には文藝上の感納的事實を離れて徒らに屋上架屋の弊に陥つた所謂腐儒的頭巾の氣を脱しないものも決して無いとは言へまい。是れは曾に『神曲』のみならず古今東西にわたつて文學研究の上に絶えず生ずる一種の瘡蓋のやうなものである。『詩經』の例を見ても『源語』の例を見ても此の理は分からう。されば眞に文藝の論

をなさんとするものは此の瘡蓋を見わけて之れを剝ぎすてる覺悟がなくてはならぬ。即ち斷えず自家が直接の感納的事實に立ち還へるの大切なることを忘れてはなるまい。

併し勿論自家の感納のみを標準とすることの出来ない場合もある。外國文學研究の如きは其の一であらう。今試みにダンテが『神曲』の主なる趣味點を自他に參して數へたらば(一)寶物的(二)事象の宗教的傾向(三)智識の集積(四)詩中の人情(五)詩中の叙景(六)詩の聲調(七)歴史的背景(八)詩中の金言(九)標現的意義こんなものであらう。

此のうち(二)事象の宗教的及道德的傾向といふことは中世當時の人にのみ趣味あつて今日は其の感動力のいたく薄れてゐることを忘れてはならぬ。地獄極樂の記事は地獄極樂の記事として當時一般の讀者に多大の趣味を供したに相違ない。之れは當時の宗教とい

ひ知識といふものゝ状態から推して察せられる。ダンテは眞に地獄の火に毛髪まで焦して來たかと思へばこそ地獄の卷が活きて來る。是等は今日の變遷したる智識宗教道徳では感動の源とは殆どならぬ。たゞ當時の時勢としてはといふ條件の下にかすかに嘆稱の感を惹くのみである。(三)の智識の集積すなはち當時の最高智識を集めて近世を豫表するといふ點も今日ではさしたる感動の源とはならぬ。(六)の詩の聲調といふことは原作では最も重大な趣味點であらうが其れは伊太利人乃至伊太利語に熟通すること猶日本人が近松を讀んで其の文中の音樂を味ひ得る如くなるものにして始めて分ること、翻譯文學の上には應用の出來かねるものである。斯くの如くして『神曲』中より現在有力の詩源を得やうとすれば、寶物的すなはち傳來の有難味などいふ一種の感情詩中の人情深き挿話、

詩の景趣の妙なるもの詩中に見えたる歴史の味ひ、片言隻句の眞理及び最後なる全曲の標現的意義等を參酌せずばなるまい。事實に於いては、サルドッは此等の件中最後の標現的といふことを除いて他の諸要素を悉く利用し且つ或る程度まで成功してゐる。原作の寶物的光澤を背に負つてゐるのは勿論のこと、作中の重なる挿話をも集めて全劇を組み立てゝゐる。書割舞臺も多分は『神曲』中の詩景を本としてゐる。勢脈として中世伊太利の歴史を思はせるの利も忘れては居らぬ。さるにも拘らず作者みづからは號して是れ標現劇なり歴史のダンテに非ず、外形のダンテに非ずといふ。言ふところは『神曲』にダンテが精神的煩悶と變遷とを見て之れを此の劇に標したりとの事である。而して吾人は判じて、『ダンテ』劇の趣味此れに非ずして却つて彼



れに在りといふ。而して其の理由は専ら標せらるる所の理そのものが空漠である爲めと断じた。

ダンテはヴージルに導かれて地獄界と淨罪界とを巡り、ピアトリスに導かれて天堂界を巡った。又到るところに種々の感慨をも述べ、教訓をも見聞した。ヴージルは成程理性の標現かも知れぬ。ピアトリスは成程情または愛の標現かも知れぬ。併し元來『神曲』全體の上にも明かな一の標現的意義ありと見るのは果して當を得たものであらうか。而してそれが果してサルドッのいふ如く『人生たゞ善を愛するの外無し』といふ理であらうか。是れは頗る疑はしい。片言隻句を集めて抽象したらば、そんな哲理も組み立てられぬでは無からうが同じやうに他の哲理も組み立てられる。此は推理家に往々ある所の抽象法上の危険である。

假りに百歩を譲つて斯くの如きが『神曲』一篇の落想であるとしても、更にそれが眞に此の詩の感興の要素であるか否といふことは、一層大なる疑問ではないか。吾人はおもふ單に斯くの如き抽象思想は、今人の想像経験を披揚するに適せず、あまりに手ずれたれば、またあまりに空疎なれば。

以上之れを要するに自由といひ、人生善を愛するに止まるといひ、ダンテ劇が標現せんとして敗れたる所の思想は、思想みづから美術の標現としては不適當不適切のものである。

次に標現美術の他の要件たる標象と理との適應といふ事、即ち技巧の感興もサルドッの此の作では殆んど皆無といつてよい。せめて此の感興でもあらば美術としての地位は保ち得らるべきこと、繪畫などの比較的技巧の勝つた美術の例でわかる。が今の場合、舞臺の上

のダンテが、成程自由といふものゝ権化かと思はるゝ様な面白味は一つも無い。夫の『ファウスト』中の悪魔がいかにも人間の迷ひといふものゝ権化かと思はるゝ所に妙味あるとは全く違つてゐる。また筋の全體乃至種々の出来事の上、いかに巧みに人生云々の哲理が忍ばせてあるなどいふ感も起らぬ。是れまた『ファウスト』の場合とは格別の差である。

以上の論據から吾人はサルドッの標現劇『ダンテ』が其の標現といふ點に失敗したものと云ふ結論を確かめる。即ち標現の二字を看板から取り下ろし、單に劇『ダンテ』として之れを見る。

劇『ダンテ』の感興は或る度まで前に擧げて『神曲』中の詩源から生ずる。すなはち『神曲』を崇める情も此の劇の感興の一要素である。其の中の詩景が本になつてゐる舞臺面も感興の一要素である。臺詞中に

原作の名句が出て來るのも感興の一要素である。伊太利の歴史を想ひ起こすのも感興の一要素である。殊に原作中の著名な挿話、たとへばウゴリノの事、ピアの事、パオロ。フランチェスカが事法王クレメント五世が事等は最も重要な劇中の感興的要素である。

併し是等すら見物の多數が伊太利の歴史を知らず、ダンテの傳を知らず、殊に『神曲』は『ドレーレーダンテ』の挿繪しか見たことが無いといふやうでは、劇の感興は益々手薄とならざるを得ぬ。

然らば結局此の劇の成功は何れにあるか。曰はく全く以上の外に於いて三つある。一は其の地獄の舞臺の書割道具立の人目を驚かしたこと。二はアーギングのダンテ其の人の扮し得て絶好と言はれたこと。三は此の劇の最後の一場が單に一場として巧みに戲曲的効果を人に與へたこと而して一は舞臺方の勝利、二は俳優の手腕

三は作者がドラマチック、コンスツラクシヨンの老巧に基ゐるものであらう。讀者は次條に書く此の芝居の概略で、以上成敗の理を味はれよ。

評論の終りに臨んで、一言注意を喚び置くべきは、此の劇の作者が失敗はしたながらも、單に劇「ダンテ」と言はずして、殊更に標現劇を望んだ所以と、書割道具立の壯嚴を極めたこととに、二個の重要な世潮の影が差してゐるといふことだ。

標現劇を望んだのは、一言でいへば高大を要求するといふ文藝擅目かの一潮流を現はしたものであらう。高大を要求するとは、人心の哲學的進轉に伴ふ文藝上の一要求である。これには單に文藝上よりするものゝ外、宗教的に實質をも併せ要するものをも混じてゐれど、本意は勿論哲學的瞑想の喜びを文藝の形によりて得んとするに

過ぎぬ。即ち其の哲學的深奥は快樂の爲めでなくてはならぬ。兎に角今は假りに之れを文藝壇の哲學的要求とも呼ぼうか。是れに對する今一つの要求は熱情的要求で、熱烈な感情の發表を文藝上に要求する。是れは少しづつ概念の内容は違ふが大體に於いて悲劇的詩的などいふ名と相通する。感情の熱烈は人生の悲劇を構成する元であるし、情に耽溺した形は詩的である。此の要求は主として現在を悲觀し現在を不満足とする人心の傾向から發する更らに是れに對して現在を樂觀し現在に満足を求むる人心よりは喜劇的要求が起る。言ふまでもなく此等の要求が今日新たに生じたのでは無い古來様々の形ちで互に差しつ引きつしてゐたのではあるが、英國の文藝は特に喜劇的要求で勝れてゐる。それが近時他の一方には搖りかへして悲劇的要求から哲學的要求に及ぶ形勢を示して

ある。劇壇でいへば即ちアーギングが「ファウスト」を取り「ダンテ」を取った所以であらう。何か高大なものをといふ人心の底の要求をあらはしたのである。併し目下英國劇壇の特色はやはり喜劇である。是れは世界に匹なしと言つてよからう。

舞臺装置の壯麗といふことは、劇其のものゝ本位を補ふ限り毫も之れを難すべき理由は無からうと思ふが、勿論其の加減は微妙である。若し一步を誤らば芝居はたゞの観せ物となり了る。一方に近時英國の舞臺装置の著く壯大になつたと共に他方には之れが排斥論者の絶えざるも畢竟此の危険を慮かつてのことであらう。難者等はアーギングを以て斯くの如き形勢を導いた責任者の一人としてゐる。今回の「ダンテ」の如きはたしかに行き過ぎたといふ譏を免れまい。スベキユタキュラルプレーといふ名は辭し難い。之れに對して目

下開場中のツリーが沙翁劇「リチャード二世」の如きは文字通りのコ  
 スチュームプレーである。衣裳道具立の壯大富麗なるは眞に人をし  
 て所謂エリザベータンゴローリーの盛事を想はしめる。此等もま  
 た同じ傾向を示すものと言つてよい。

(三)

此の芝居すべて序を併せ五幕十三場それを三時間か三時間半のあ  
 ひだに演するのであるから忙しいは勿論なれど三幕目の地獄の巻  
 七場ばかりは全く覗き目鏡的に進行するから一場十分間とはかゝ  
 らない。加ふるに幕間の嚴重なるは此方の大芝居の大芝居たる所  
 以て此の劇の如きも序幕の後に十分間一幕目の後に九分間と番附  
 に書き出した以上は一分も違へない。是れは勿論舞臺道具立の性  
 質が日本のと違ふからでもあらうが、一つは所謂稽古があらゆる方

面に十分行届いてゐるからであらう。由來日本の芝居は稽古といふものが甚だ輕薄ではないか。あれ程の大藝術を演ずるには、少なくとも三十日や五十日の肝膽は砕くのが當然だ。若し今後素人出の俳優といふやうな團體が起るとすれば、其等の人々は在來の俳優が長の年月積んだ修業を追ひ越す手段の一として、必ず此の稽古といふ點に十二分の意を注ぐべきであらう。一役を演ずるに半年の眞面目な準備を重ね、推敲を重ねる覺悟があつて始めて可也であらう。深く一筋に思案を凝らす所には必ず何等か餘人の及び得ざる悟境の來たること、いづれの事業に於ても同一である。

興行時間について思ふは、日本演劇の外形的改良のうち、最も急なるは此の興行時間の改正では無からうか。古い問題ながら、今日の場合吾人は更に世の識者と當局官府との一考を得たいと思ふ。茲に

官府といふのは、此の種の改良を助けるにこそ、最も官府法令の力が必要なからである。例へば此の種の改良を行はうといふ場合に、いつでも起る妨害は、劇場干係者の私利と衝突するといふこと、延いて之を决行すれば、此等の徒の復讐暴行が恐ろしいといふ、人氣商賣には已むを得ない弱點に基いてゐる。斯かる博徒的妨害に對してこそ、後へに劍と銃とをひかへた官權が、識者の意見を察して腕を揮つて欲しい。暴行があれば何時でも保護してやるといふだけでは役に立たぬ。官府の法令とあれば、官府の外に誰れを怨まうやうも無くなる。是れが必要なのである。

興行時間の改正、就中其の短縮といふ點からは、種々の利こそ生ずる、害といふものは生じない。是れは今日大抵の人が同意する所であらう。必ずしも西洋の眞似をして三時間と限らなくともよい。四

時間以内でも或は五時間以内でも悪くはあるまい。要は普通の往復路程を込めてほど半日以内とすれば済む。そして遊興行は一時から六時までの間夜興行は六時から十一時までの間に随意の開閉時間を選ばすといふ風に制限すれば尙結構だ。時間が短くなれば自然無駄の時間を縮める工風も是れからする。見物の頭痛疲労も是れがために無くなる。不得要領のものを三つも四つも寄せ集めて見せる弊も之れによつて救はれる。作もおのづから引き締まつたものが出て来やう。俳優も疲れることが少くなる。従つて藝に忠實にもなつて来やう。芝居見物といへば一日がふりと云ふ悪風も消える。場内で飲食を除儀なくせらるゝ憂も無くなる。費用もすべての點から經濟になつて来る。三時間や四時間では見物が満足せぬとよく反對論者はいふがそれは取るに足らない論だ。八

時間も九時間も場内に立て籠つて夏は氣に蒸し上げられ冬は腰から下が冷えて来る。それでも金を出した以上厭といふまで幕敷を見なければ承知しないといふやうな見物は事物の改良進歩を圖る時眼中に置くべき標準の代物ではない。座の算盤から言つても、興行時間の一統縮まつたが爲にこんな見物が劇場に足踏みをしなくなるなごゝは有り得べからざる事だ。また昔の大物を通しに演ずることが出来なくなるといふ批難もあるか知らぬがそれは嘘である。「忠臣蔵」十二段でも從來歌舞伎座あたりの幕の長さから推すと工風をさへすれば優に五時間で済まされやう。且つ現在の事實から推せば斯やうな例は將來普通には有るべしとも思はれぬ。ついでに記すべきは目下英國でやゝ是れと似た劇場問題がある。其れは今月の初め倫敦で市長が文學者新聞記者などを要應した其

の席上、脚本家のピチロが提出した、西倫敦劇場の開演時間を早める  
といふ議である。従来は早くて午後八時、通例八時半から、遅きは九  
時開場などいふのもあつた。是れを七時にして十時過ぎには終は  
ることにしやうといふのがピチロの意見で、理由は種々あれど、要す  
るに早くはねる方が、夕食のため及び汽車馬車の歸り道のため便利  
といふに歸する。此議は前から多少あつたが、今回は發言者がピ  
チロといふ、日本で言つたら昔の默阿彌といふやうな地位の人であ  
るため、忽ち世の注意を惹いて、甲是乙非、諸方の話題論題となつて  
る。ツリ、其の他一二の俳優は其の座で投票を募り、新聞紙は座主  
俳優などの意見を續々紹介してゐる。反對論の主なる點は、役所會  
社通ひの人々が、大凡そ六時に退くとすれば、宅へ歸つてから芝居へ  
來るまでの時間が、一時間では足らぬといふことである。併し大勢

は七時半開場といふくらゐに折れ合ひさうだ。  
斯やうな事までが、私心我執を離れて何人の意見も公平に聴かれ、而  
して善いとなれば直ちに實行せられる。茲が此の國の美しい一點  
であらう。先頃も有名なイートンの學校で、失火の際、少年が二三人  
焼死した。其の理由は窓に鐵柵の張つてあつた爲といふ事が分か  
ると同時に、古風な格子附の窓の危険といふことが、忽ち問題となつ  
て、漸次取り拂はれることとなつた。些細の事ながら面白くないで  
いか。英國人は保守だと評せられるが、併し我執の保守ではない。  
聰明な保守である。保守と進歩と甘く調和して行く所に、此の國の  
妙味がある。大道の上は十八世紀式の乗合馬車で、地下は二十世紀  
式の電車鐵道が走り、夜は瓦斯燈と電燈と半々に町を照す。箇の中  
の教訓を味はないで、英國は歐羅巴の支那となりはすまいかなとい

ふのは、まだく／＼至らぬ考であらう。

餘程話の方角が外れたやうだが改良ついでに向一つ申したいのは、劇評といふものを今少し何とかしたいと思ふことである。尤も記者が國を出てからも既に二年近くなるから其の後如何に變じたかは知らず。且つ當時から引き續いて向上の途を歩んでゐる人もあゝるのは明かであるから、茲には假りに三四年の昔を標準として立言する。即ち昔の劇評といふものには自分の洒落を發表するためだか、近附の俳優に挨拶をするためだか、招待せられた禮心に太鼓を叩くためだか、役者を教へる料簡だか、見物を導く料簡だか、一向に衣體の知れないものがあつた。「よくしてゐたり」的の評判記は、もう大抵にして非ッてもよさうに思はれる。つまり劇評といふものを、今少し標準あり見識あるものにして、今日の劇運進轉に十分の地歩を

占めて貰ひたい。もつとすつと文學的になつて欲しいのである。

劇の刷新といへば脚本も俳優もよくなるべきは勿論であるが、同時に見物も善くならなければ駄目だ。而して見物の進歩を促す唯一の助けは新聞雑誌の劇評であらう。此の點から言へば、今の劇評は最も見物教育の方面に力を傾けて貰ひたい。文藝の批評といつたら目的は一つには限るまいが、今の場合、否恐らく凡ての場合に於いて最も貢獻の大なるは作者を教ふるが爲にも非ず、學理に資するが爲にも非ずして、専ら觀者を刺戟し誘導する點に存するのであらう。

批評の三大効果といふうち、作者の批評によつて悟入する場合も無いが、是れは寧ろ困難且つ少數である。又批評が直ちに美哲學の經驗的方面となるといふのは、すつと専門學に偏しての効用である。結局殘る所の觀者に對する刺戟といふことが、文藝批評の



効を爲す大部分たるの理は、之れを近く我が小説史發展の跡に見るも明白ではないか。従つて此の種の目的を達するためには必ずしも批評は分解的でなくともよい。所謂印象的批評の方が一層此の目的に適してゐるかも知れぬ、但し本來批評法を分解的印象的などと分かつのは、大體の論たるに止まつて、進歩せる批評にはおのづから兩者錯綜して用を爲すこと固より異じむに足らぬ理であれば、方法の如きは何れによるも不可なしである。要は其の批評が批評家の眞實なる藝術的感納に基づくことと、一世の趣味を啓發しやうといふ明白な目的を有することと、及び是れに表せる批評家の感納性そのものが一世の水平線以上にあることを示すだけの用意とを具備するを以て足れりとする。されば予輩は切に新聞雑誌の局に當たらると諸家に望む、後の明治演劇史をして必ず新聞雑誌の劇評が

劇壇進轉の半面の要素たりしことを忘れ得ざらしめんことを。

さて愈々「ダンテ」の本文に取りかゝつて、序幕は伊太利ピザに於ける餓塔出場人物の重なるはアーギングの男主人公ゲンテとレーナ、アシユールの女主人公ピア、其の他史上の著名な人物では大僧正ルチエリ及び其の敵ウゴリノ。是だけの人名を見ても、此方の讀者には既に十分の想像を廻らす材料がある。たゞ茲にダンテの子までなしたる昔なじみとして、且つ今は他人の妻となつて其れが爲に悲惨の最後を遂げる女主人公としてピアを點出したのは、全く作者の架空で、其の結合法がやゝ唐突なため、感興を薄める嫌ひがあつた。ピア自らとしては、ダンテの「神曲」中他のフランチェスカなどと同じく著名な女性の一人で、後世文藝の材源ともなつてゐるが、曲中のピアに關する句は極めて短いものである。寧ろ暗

示力に富んだパワフルな句といッてよい。即ち淨界の巻第五節の終りに

“Ah! when thou to the world shalt be return'd,

And rested after thy long road,” so spake

Next the fair'd spirit; “then remember me.

I once was Pis. Sienna gave me life;

Maremma took it from me. That he knows,

Who me with jewel'd ring had first espoused.”

(Cary)

とある、痛恨極まつた數句がそれである。専ら是れだけの暗示をたよりに、ピアに關する悲劇は組み立てられるのであるが、サルドッの「ダント」も一面此の暗示に解釋を試みたものには相違ない。併しサルドッは全く史的事實を避けて之れを解釋した。「ダント」劇では前言つた如く、ピアをダントの情婦とし、且つベンマといふ娘の子まで出來

てゐる。ダントが時事非にして放浪の身となるや、ピアは此の隠し子を姪と稱して他へ預け、自らは子ロの妻となる。而かもピアがダントに對する歡情は依然として昔に變らぬ。狼戾なる子ロ之れを知ッて、遂にピアを瘴毒の中に投じ殺す。といふのが此の作に於けるピアの悲劇である。

是れだけの筋も、ピアを主人公として書いたら、随分立派な悲劇が出来るであらうが、茲には唯之れによつてダントの精神的煩悶を反映させやうといふに止まるから、挿話たるの價値しか無い、描寫が略である。随つて今回の女主人公といふものは、極めて割のわるいものになつてゐる。ダント一人、アーギング一人の芝居と見てよい。而も已ならず、ダントといふ人物の裏に、私通、私生兒、乃至姦通に近いやうな情事を見せたのは、當時の事實あり得べきこととはしても、二十世

紀の人に訴へる劇として決して策の得たるものとは言へぬ。況んや其れがわざ／＼作者の作り設けた點であるに於いてをや。如法のダンテが舞臺に出て來るとき見物は覺えず片唾を呑んで彼れが嚴肅の氣に打たれる。けれどもやがて其のピアとの關係を知るに至つてや／＼興醒むる感がある。といふのは決して偉人傑士の裏面に此の種非常の情事を點するのが悪いといふのでは無い。場合によつたらダンテと姦通といふやうな矛盾的配合でも書きやう一つでそれを立派に調和させることが出來やう。茲に予輩の提出する批難は此の書きやうにある。言ひかへれば單に挿話として疎筆を用ふる場合に斯やうな矛盾的感情を并舉してそれを調和するだけの準備を與へないのは結局感情の破壊に過ぬといふ批難である。伯爵ウゴリノと大僧正ルヂェリとの話は、これまた「神曲」地獄の卷第三

十三節に有名である。歴史によると當時十三四世紀の伊太利は亂麻の世、此の二人も結局機勢の争奪から敵身方となりウゴリノはルヂェリの謀に中たり人民に追はれてグツグランテの塔に逃げ込み、一門數名九箇月の間其所に隠れて終に餓死する。是れより幾久しく此の塔を餓塔(タリー、オブ、ハンガー)と呼び、十七世紀の中頃までも後人懐古の種となつて存したといふ。是れだけの史的事實に加ふるにダンテの詩の力を以てした好材料の上に、サルドッは此の挿話を組み上げたのであるから、史的感興を呼び起こすものとしては、一畧限りに一種の面白味があつた併しあまり深い感銘はなかつた。畢竟今日では此の慘澹たる光景のみに感傷があつて、其の經過は多く同感の料とならず、随つてごちらかと言へば、時間的よりも空間的の詩境で、繪畫の方に一層よく適して、劇詩には不適當なのであらう。尙

ほ此のウゴリノの事も劇中の一挿話であるが、ピアの事其の他後の  
 パオロ。フランチェスカが事ゼンマ。ベルナーチノが事牧師長コ  
 ロンナが事等もすべて挿話である。要するに此の芝居は種々の挿  
 話をダンテといふ一人物で差し貫いたものと見るべし。  
 さて大序、オーケストラの樂休むと同時に、幕を静かに捲いて取れば、  
 正面少し下手より石と土を疊んだ塔形の塔の外景を取り付け、  
 其の左右が町つゞきの道、上手横は寺の入口で仕切り、尙奥には一帯  
 の流れの遠見塔の二階を狭い窓で見せ、下入口には番人の部屋を見  
 せる。凡てビザの餓塔のおもひき。時は冬、雪のちらつく景。塔の  
 前で數人の市民等ががや／＼と立話の體、噂は勿論塔の中なるウゴ  
 リノの身の上と知られる。其の内一人が上手の寺をさして、彼處に  
 ダンテが居るといふ。是れで見物が一齊に視線を寺の階段の方に

集めると、それに迎へられて、アーギングのダンテが、つと現はれる。  
 拍手の音雷の如く起こる。  
 ダンテの拵へは極めて寂びたものである。着附は柄色の長きガウ  
 ンに身を包み、同じ頭巾を被つてゐる。顔の造りは、アーギング一流  
 の面長の嚴肅な顔がそも／＼既にダンテ的である上に、彼のダンテ  
 の死顔から取つたといふ世上流布の彫塑を其のまゝ寫したものであ  
 るから、眞實のダンテ世にあるとも見分けはつくまいと言はるゝ程  
 の肖顔に出来てゐる。例の有名なボツカチオのダンテ傳に書いて  
 あるもの、其のまゝであるから、之れを假りて彼れが風貌の説明とし  
 やう。曰はく、ダンテは壯年後、少し前屈みに、嚴肅な静かな歩行さぶ  
 りで、常に年配相應の時様の服をつけ、顔は長く、鼻は鷲の爪形、眼は寧  
 ろ大に顎も大きく、下唇常に上唇を覆ひ、肌の色は濁りて、髪は濃く黒

く縮れ顔相は沈鬱にして考深く見える。問はざれば多く語らず、語れば雄辯また美辯であつた。日本の俳優間に此の發相を求むれば故園十郎の外得がたいであらう。全體園十郎とアーギングとは容貌態度及び藝風までが或る程度まで似てゐるのも妙である。ダンテはいまフロレンスの都から追放の身となつて、此のピザに來たり、茲で情人ピアと會見することになつてゐる。ピアの夫子ロは出陣の留守。さてダンテが寺の階段を下りて舞臺の中程に來ると、同じく上手からレーナ、アシユールのピア、青色の勝つた、同じく伊太利當時のゆるやかな服装で出て來る。町の人々は其のうちに退散する。

二人となつて、始めは立つたまゝ男女の肩のあたりに軽く手を障へ、後は寺の階段に腰かける。すべて緩やかな動作を交へて暫くのあ

ひだ雙方掛合の述懐となる。昔の樂しかりし戀は、今はたゞ夢なり、我等が戀ほど果敢なきものはあらじ、この意から娘ゼンマの上に移り現在の父にすら逢ひ得ぬ子の哀れさよと、暗涙を呑むこなし。清き戀のピアトリスは天にあり、たま〜情を交はせしピアは人の妻となり、娘は日蔭者、己れは遁竄の身、此のさきのダンテは殆んど世路の險しきに堪えざらんぞじてゐる。此の芝居に一貫の情趣がある。とすれば、其は是れであらう。全曲の出來事すべて此の一點に歸趨し、層々轉するに従つて、身の上、人の上に降りかゝる憂き艱難、ダンテをして流涕太息の外なからしめる。而して遂に自殺を想ふに到り、夢の如く幽界の幻想に入つて、漸く徳と愛との悟りに還る。「神曲」地獄の巻の書き出しに「浮世の路半ばにして、我れ暗澹たる森のさ中に迷ひ入りぬ。」といへる前半のころは、此の劇に於いて刻畫の跡明

かと言つて宜しい。たゞ天堂の巻の初節愛なるかな天は之れに則る以後の情が何處にも出て居らぬため全篇としては甚だ心を得ざる劇となつたこと前條に論じた通りである。

ダンテとピアとの述懐が終らんとする頃再び塔の下手から多勢の町民が打ち連れ出で來たり口々に塔の窓に向かつてウゴリノを罵る。蓋しウゴリノは前言つた如く町民を虐げたといふ廉で町民の憎みを受けた上に政敵の謀に陥つて二人の子及二人の甥と此の塔に閉ぢ籠められてゐる。町民等は罵るのみで飽き足らず石泥などを拾つて窓から投げ附ける。あたりの騒がしいのでダンテはピアに其の理由を聞きウゴリノの罪も少からねど其の惨害は何事ぞやと愴然たる介。其のうち上手から俄かに武器を携へたる一隊の暴徒が押し寄せ來たる。之れを導いてゐるのはウゴリノの伴の妻で、

夫及び一族を塔の中から救ひ出さうとする。舞臺は忽ち一面の修羅場となる。ピアは傍に避けダンテは争亂を鎮めんと其の中に立ちまじる。此等すべて小争闘の絶え間なかりし當時伊太利の光景を寫實したものと稱せられる。

塔の戸を打ち破らんとする騒ぎに塔中のウゴリノは始めて高い窓から餓鬼の如き顔を出す。幸うじて格子に取りつき絶えなくの口調で子供等が足下に枕をならべ死にかゝつてゐることを述べる此の場の光景は前述べた神曲地獄の巻第三十三節が具さに之れを描いてゐる。蓋し神曲中最も悲惨なる記事の一つ否恐らく古今東西の文學中最も悲惨なるものゝ一つと見られやう。四人の子供等が、餓に弱りながらも父の苦痛を見るに堪えず父上せめては我等が肉を食みたまはずや。我等何か厭はん。我等が五體に纏ふこの見る

影もなき肉塊是れみな父上の賜なり。再び之れを我等が上より取り去りたまへといふよりして、其の子供等が次々に餓ゑはてふは斃れ行く様を描いたあたり、酸鼻を極めてゐる。芝居の此の場も、勿論右の詩を背景に持つてゐるため、一段惨絶の氣を加へた。

ウゴリノの影が見えずなると、又も入口を破らんと押寄せ騒ぐ半へ下手口から手にく、燈明をかざしたる杖を捧げさせ、二三十人一隊の僧を率ゐて、大僧正ルヂェリが追入つて来る。暴民どもは其の威に恐れて退く。ウゴリノの嫁ダンテ等踏み止まり、或は袖にすがつて嘆願し、或は理非を擧げてウゴリノの赦免を頼む。其のあひだ思案の體に何事をも言はざりしルヂェリは、聞き了つて、從僧を顧み、塔の番人から鍵を受取らす。人々ウゴリノの解放かど一寸色めく間に、ルヂェリはつかく、と上手奥の川岸に立ち寄り、水心を目かけ、塔の鍵を

投げ込む。それと再び暴徒が駆け寄るのを、僧兵が防ぎ留める小せりあひ。ダンテは進み出で血相かへて、ルヂェリに肉薄し、ウゴリノ一人こそ罪すべくもあれ、無辜の一族まで此の慘禍にかゝらするとは、非義なり、非道なりと論詰する。此の時のダンテは何時の機にか、劍を抜き持つてゐる。ルヂェリは冷然として争はず、手に持つたる十字架の錫杖を高くさしあげ、神の名によつて茲に法權に及向ふダンテを破門す、とおごそかに言ひわたし、錫杖を地に伏せる。自餘の僧等之れにつれ一齊に其の法燈を地に揃きて消す。舞臺ひっそりとなる。此の瞬間は流石に人をして法權全盛の世のさまを忍ばしめ、満場森として莊嚴の氣に打たれた趣きであつた。

ダンテは始め法權に及向ふと聞いて、其の劍を投げ棄て、慨嘆の形ちで横向につつ立つてゐる。ウゴリノの嫁は氣絶して階段の上へ倒

れる。身方のもの駈け寄って介抱などする。ダンテが嗚呼汝ビザの町耻ぢよ。此の麗しき地伊太利の聲聞く處に住ふ人々を云々の臺詞で幕(ダンテ)が先に行きかけて幕であつたか、一足跡に残つて此の臺詞を言つて幕であつたか記者忘却。此の結末、ビザの町を罵る臺詞は原詩中やはりウゴリノの條にあつて有名な句である。茲には言ふまでもなく之れを臭はせたもの。

以上序幕中での山は第一がピアとダンテの對話、第二がウゴリノの塔第三がルヂェリの鍵を川に投げ込んでからダンテを破門するまであるが、其のうち最もドラマチックなのは第三である。始めの邊は少し騒しすぎて舞臺に落ちつきが無いと感じたが、鍵を棄てるあたりから大いにしんみりとした芝居になつた。

次に二幕目は二場第一は伊太利フロレンスの春祝ひ、序幕から十年

許り後の事となつてゐる。序幕の恐ろしき俄塔に對し、此の場は南國の春といふのであるから舞臺の華やかなこと此の上もなく中央に根を張つた大木の花の樹一本及び神女像の紀念碑を見せ、奥深くすべて滿林の花爛熳と咲きさかり見る限りの紅雲、さながら日本の櫻時の趣、上手はマラテスタ即ち夫のバオロ。フランチェスカの悲劇に敵役に立つ人の屋敷でしきり下手は花光線は極めて晴やかに暖かなのを使ふ。

幕明くと二三十人の若き男女等、いづれも十四世紀伊太利の緩やかな華手衣裳の裾を春風にかへして花の下を戯れ興じゐる。彼方には戀慕の歌に春の調奏づる樂手、碑像の下に倚りかゝつて餘念なく聞き入る美人、今この時と大木の蔭に寫生の畫脚を立つ畫家、花祭の行列、痴蝶狂英、笑體、歡語、全力を盡して當時暗黒時代の眠りから覺



めんとする新伊太利の若やかな人心を描出し、時も春人も春人生の歡樂たゞ此の時といふ情景をあらはすのが此の場の趣意である。若し舞臺装置の目的がアトモスフィアを見はすにあるとすれば、此の場の如きは最も其の意に合つたものであらう。必ずしも彼のクレグ流に一抹の色で舞臺を包むといふやうな法を取らず相應に手敷をかけて寫實をしながらも其の全體が一つに溶け合つて、人をして懐に入る風の捉へ難きが如き感を起こさせるのが、アトモスフィアのよく見はれた所以である。

此の場に出て來る主要人物は、ダンテの外、レーナ、アシエルが二役として勤める娘ゼンマ、其の情人ベルナーデ、及びピアの夫テロ等。また場面の賑ひとして出る人物も、詩人音楽者等みなダンテの知人で、史上に有名な名をつかつてゐる。例へばダンテの詩を樂器にか

けて歌つてゐるのが音楽家のカセラ。寫生をしてゐるのが伊太利畫家の父と稱せられるジョットといふ類である。

人々が浮れ狂つてゐるあひだ、前面上手によつた圓柱の下に蕭然と身を寄せゐる一人の旅僧、墨染の衣を長く肩より掛け、同じく黒のモンク頭巾、目深に頂いたのが、周圍の鮮かな光景に、反照して、紅を溶いた中に一點の墨を落とした如く目だつて見える。是れがダンテである。娘ゼンマの恩愛にひかれ、身を僧と寢して、十年のさすらひから再びフロレンスに忍び歸つたところ。

ゼンマ今は十七八歳の娘ざかりとなり、情人ベルナーデの妹フランチェスカが嫁づいたマラテスタの家に世話となつてゐる。茲で注意し置くべきは、此のゼンマが第一には母のピアと同じ女優によりて扮せられるため、第二には歴史上ダンテの妻となつた婦人の名が

同じくゼンマであるため、往々不注意な見物をして混雑を來たさしむる嫌がある。此の劇に於ける娘ゼンマは全く作者の架空なることを忘れてはならぬ。

女づれの二群が去つて、ジオット。カセラなど三四人の若者のみとなり、舞臺が静まると始めてダンテが漏らす嘆息の聲が耳につく。人々驚いて聞き覚えある聲音と、旅僧の顔を覗き込み互に耳打ちして訝がる體、ジオットがダンテ！と押しつけた太い聲で叫び、みなく取り圍んで懐かしがる介白伊太利第一の賢者と當時の若者等に敬慕せられてゐた趣を見せる。

若者のうちにゼンマの情人ベルナーデノが居て、ゼンマの今こゝへ來ることを知らず。恰かも後の方から一群の女が笑ひさどめいてマラテスタの家の横手奥へ通り過ぎる。其の中にゼンマも交り

ゐて、ベルナーデノに情の笑みを送りながら、マラテスタの家に這入りかける。ベルナーデノが之れを呼び止め、會せたい人があると言つて、ダンテに引き合はす。ダンテとゼンマと二人限りとなり、舞臺の正面に相觸れて立つ。

此の後しばらくが管にアーヴングの世話に於ける技倆の見せ場であるのみならず、此の芝居中で最も人情のこまやかな所である。泣いてゐる見物も多い。

ゼンマは自分の父とは更に知らず、始めはよそ／＼しく請け答へたけし次第にいぶかしく思ふさま。ダンテがそれと明かし兼ねて、餘所ながら恩愛の名のりをする一句一動の表情は断腸といふ評であつた。動作はさして激しからねど、兩手に己が頭を抱へて悶へるが如く、ゼンマを抱き寄せんとしては抱きかね、さりどて捧げたる手を

引きもしかねたるおもむき身をかどめしまゝ少しづつ地位をかへる等、臺詞の文につれて絶えず姿勢表情の變化を力めてゐる。斷續はあれど兎に角相應の長時間、アーダング一人の舞臺で、じんとした場面であれば、自然臺詞が重に耳につく。聲柄は堅く腹の中から出るやうで、調子は寫實ではあれど、本來が眞面目で大きなものに適した性の上に、ダンテといふ威嚴を絶えず腹に持つてゐるため、半ばロマンチックに聞こえる。つまり世話とも時代ともつかぬ氣合で行く。總じて故園洲を想像するのが最も近い呼吸かと思はれた。終りに覺えずちよつと泣き落とす所など、如何にも腹で泣く藝のクライマックスと受け取れる。

親子愁嘆の後、ゼンマはマラテスタの家に入る。此の前後ふたゝび舞臺騒がしく、夫のピアの夫子ロも出で來たり、ダンテとピアとの干

係及びゼンマの身の上をも聞き知りたりとて、嘆悲やるかたなき趣、ダンテと言ひ争ひし上、此の復讐は先づゼンマよりと齒がみをなす、劍を鳴らして駆け去る。ダンテはゼンマに罪なしと論ずれど、聽かず、引き留めかねて途方に暮れゐる所へ、忽ちマラテスタが家の奥の方騒がしく、一人の小者慌だしく出て來たり、其所にたゞすむダンテを誠の僧と心得、唯今奥にて人死ありたれば、直ちに入り呉れよといふ。ダンテさてはゼンマがはや毒手に罹りしかと、狂氣の體にて駆け入る。戶外も人々狂奔の體。幕。

次は此の家の奥の間で、ゼンマと思ひしは意外にもパオロ。フランチェスカが枕を并べて刺されたのであるといふ組み合せ。

(四)

前來、初幕第一場、フロレンスの春祝ひにダンテとゼンマとの邂逅

の條まで書いたれば、次は其の第二場前回の上手に入口ばかり見え  
てゐたマラテスタの住居の一室を見せて幕あく。

正面中程を暗い色の大カーテンで仕切り、奥は別間の體けたまじ  
い人聲と共に、カーテンの端を分けて刀を提げたまゝ出て來るのが  
此の家の主人マラテスタ、歴史の傳へる如く、背むこの氣味にて醜く、  
顔は際だつて蒼く塗り、酷薄の中に妬心燃ゆるが如き眉目のつくり。  
今しも奥の間で妻のフランチェスカと弟のパオロとを刺し殺して半  
狂亂の趣であらはれる。遂に妻弟をまで殺す身となつたるは無念  
至極といふ意味の臺詞動作ありて、下手口よりダンテの入り來ると  
引きちがへに、上手口へ足早に立ち去る。

ダンテは自分の娘ゼンマが子ロの爲めに殺されしものと思ひ込み  
て、疾風の如く下手口から駈け入る。室内を見まはす間につづいて

入り來し剛が正面のカーテンを掲げると、其所にパオロとフランチェ  
スカとの死體が横たはつてゐる。ダンテは是れを一目見て驚くこ  
なし、死體の側に身を寄せて愁嘆のうち、他の人々も集ひ來たる。其  
の中にダンテの娘ゼンマも姿を見せると思ふと忽ち子ロの爲に追  
ひかけられ、ダンテが、あなやと身を起す刹那に下手口へ追ひ込まれ、  
つづいて入りし子ロは、吐嗟に跡を戸ざし切る。ダンテは覺えず大  
音に叫びながら戸際に迫りて、明けんと暮れと緝じめく。メロドラマ的混  
雜の中に幕であつたと記憶する。

此の場は單にダンテをしてます、所謂世路の險惡を感せしむる  
といふより、外筋としては、重要な關係はない。此の芝居での  
續き合ひは、たゞゼンマが今は友達フランチェスカの縁先たるマラテ  
スタの家にあるといふことと、其のフランチェスカの殺されるのと、ゼ

ンマの子ロに捕へられるのが同時で、そこへダンテが落ち合つた  
 といふだけ。是等は勿論すべて作者サルドッの架空である。而して  
 何故に作者が斯かる疣贅に近いものを附加したかといへば言ふま  
 でも無く、ダンテといひ伊太利といふ名から此のパオロ。フランチェ  
 スカの挿話を切りすてるのは、乙女の髪から紅の簪を抜き去るやう  
 なものであるから。且つや是れに見ても如何に此の劇が歴史傳説  
 の上に趣味の源を穿たんとしてゐるか分かる。言はゞダンテと  
 いふ寶庫の中なら、伊太利由緒の古錦綱や古寶珠を取り出して綴り  
 合せたやうなものだ。

パオロ。フランチェスカの傳説に關しては知る人は誰れも承知の通  
 り、十三世紀の頃伊太利リミニの豪族マラテスタが其の妻フランチェ  
 スカと自分の弟パオロとの道ならぬ戀を憤り之れを刺し殺すとい

ふ、即ち此の芝居通りの事實が残つてゐる。マラテスタは醜く、パオ  
 ロとフランチェスカとは類ひ少なき美男美女であつたといふことも  
 傳へられてゐる。其の戀の成り立ち、結婚の事情などに關しても色  
 々傳説あれど、それは省いて、此の一種の心中談、女敵討が、全歐羅巴の  
 文藝に、不盡の源となり、人をして此の名に言ふべからざるフアンチ  
 ーションを感せしむるに至つたのは、主としてダンテが之れを其の初  
 めに詩化し、強い鮮かな言葉で世に刻みつけて置たからであらう。

..... One day,

For our delight we read of Lancelot,

How him love thrall'd. Alone we were, and no

Suspicion near us. Oft-times by that reading

Our eyes were drawn together, and the hue

Fled from our aler'd cheek. But at one point

Alone we fell. When of that smile we read,

The wished smile so rapturously kiss'd  
 By one so deep in love, then he, who ne'er  
 From me shall separate, at once my lips  
 All trembling kiss'd. The book and writer both  
 Were love's purveyors. In its leaves that day  
 We read no more.

(GARY)

即ち『神曲』地獄の巻第五節の末で、フランチェスカの靈が二人の戀のそ  
 もくを思ひ出語りする條が是れである。暖國の燃ゆるが如き若  
 き情緒に見事人世を焼き捨てたる、哀しき戀の本末、此の數行の中に  
 遺憾なく提示せられて、之れを説けば千萬言の心ともなるであらう。  
 蓋し『神曲』全篇の挿話中、推して第一といふも不可なし。古來有名な  
 繪ばかりでも、此の題で想像を役したものが幾らあるか知れぬ。現  
 時の劇では、伊太利のダンヌンチョが作及び英のヌチーブン、フリッブス

が作など此の題で最も有名なものである。

ダンヌンチョの作はフリッブスのに比べて長いが、全體の落想は似たも  
 のである。即ちダンテが描いた結局を、作者々々の想像で展開する  
 といふに過ぎぬ。ダンヌンチョのは伊太利第一の女優デューゼが先頃  
 倫敦でも出した。フリッブスの此の春彼のペンソン一座で演じた  
 が、ペンソン一座は例の沙翁劇専門で賣つてゐるもの、フリッブスは沙  
 翁の故郷ストラッフォード、オン、エザンの人といふ關係から、沙翁紀念座  
 で此の芝居を打ち引きつゞいて處々に之れを演じてゐる。本來此  
 の劇は濡れ場の名人ジョージ、アレキサンダーの爲に書いたもので  
 ある、やはり二人花園の露しとどなる中で、ランセロット物語を読み讀  
 み、戀慕の關に迷ひ入る場が最も傑れてゐた。最後の場、戀愛が絶頂  
 に達して、此の戀遂げんがためには煩らはしき此の世より早く我が

魂を清かる方へ伴ひ給へと相抱くに至る、一篇の眼目の所は、此の作も、ダンヌン、チヨのも、作者が腕を叩いて鍊った名文句である。突如他行中の夫が歸り來たつて、こゝに悲劇はカタスツロフキに達する。勿論夫も悪人とはなつてゐないから、死骸の上に涙を潑ぎ、接吻して二人を同じ墓場に送る。全體に於いて日本の心中談といふものゝ落想を同じくし、單に是れのみならば、日本では敢て珍しい談柄とするに足らぬ。是れ、一つは東西文明の性質を異にしてゐるからであらう。此の點からいへば、近松西鶴はいふに及ばず、我が國在來の心中談の多くは、傳へて以て西歐の人をして思慕の源たらしむるに足る。日本は最も多くローマンスを實行してゐる國である。たゞ其のやり方が例の通り小スケールで、手短かで、單純だ。ちよつと義理人情の矛盾に逢へば、すぐ自暴自棄の結論に達する、死んであの世で

添はうといふ覺悟が誠に早くつく。是れは概して思想が淺薄であつたからでもあらう。されば文藝が若し此の題に觸れるときは、必ず此の淺薄單純を變じて、そこに蜘蛛手八重手の思想路を開き、隨つて煙波無限の感情を是れから引き出さねばならぬ。斯くして冥想の上にも最も長く滯り得る工風をするのが、美の要訣であらう。勿論我が邦古來の作家といへども、皆分相應に之れをやつてゐるには相違ないが、偉觀は近松に止めを刺す。此の方面では、彼れは確に時代を超してゐる。但し他方に於いては、彼れといへども人の子である限り、時勢の背景を其の作中に持つてゐるのは、言ふまでも無い。即ち作全體の釣合に於いて、今日から見れば消極に過ぎ、不自然に過ぎ、ツリギアルに過ぎた東洋道徳の色が稍々多分につけてゐるのは、蓋し周圍の然らしめた所であらう。されば彼れが作に破綻の生ずる

のは常に此の理由からである。西鶴は近松の此の弊を脱すると共に近松が有せざる弊を有してゐる。寫實かは知れぬが概して淺はかで情性の前には理性が譯も無く暴されてしまふといふ人生が西鶴である。馬琴の人生はちやうど其の直反對に、理性の前には情性は初めから全くいぢけてしまふ。何れにしても我等が今日より見る人生の興趣は、こんな單純なものではあるまい。而して其の複雑さに觸れるのが詩の極意であらう。

第二幕第一場ダンテが情婦ピアの死處はマレンマの瘴毒の城夫子口の爲めに茲に閉ぢこめられ、一室の寢臺の上に横はつたまゝ毒熱に冒され、死に瀕してゐる。ピアは例の如くレーナ、アシュウルの扮する所で、室内は薄明りの體、茲へダンテが其の所在を聞き知つて忍んで来る。侍きの女が被ひを引くので、ピアは目をさまし、半身を起こ

すとダンテも身を寄せる。ピアは娘ゼンマが子ロの爲に追はれ、サン、ピエツロの尼寺に居ることをダンテに告げ、永訣の臺詞などあつて遂に落ち入る。ダンテは初めから寢臺に添うて見物に背を見せたまゝ、悲嘆の白介、ピアはダンテと共に、子ロの殘刻、ことにゼンマに對する不法などを憤るあたり、ちよつと得意の激烈な調子を聞かせ

たばかりで、此の場全體に大した藝は無し。明りを消し黒幕をおろすと、舞臺は第二場サン、ピエツロの尼寺に變る。茲ではレーナ、アシュウエルが早變りを見せて、二役ゼンマに扮する。母と娘を同じ女優が而も僅か二三分間に演じ分けるのであるから、浮かとした見物には、ちよつと混雜を來たす。日本では此んな事は展くやるが、此方ではあまり見ない。

さて此の場もあまり大したことは無い。正面奥深く中央に幕を絞



ッて神壇を見せ、舞臺上手寄に二三十人の尼、いづれも一様の黒の法衣に白の被さきもの列を正して下手向に立ち並び之れと對して、上手向に卓子を控へて腰かけてゐるのが、同じ拵への尼院主、新道心のゼンマを救護せんとしてゐる體で黒幕上がる。

呼び出しの聲に應じて、上手口からゼンマ、俗の拵へで入り来る。尼院主之れを卓子の前に立たせ、其の尼となるのを拒む不心得を誡め、また情人ベルナーデヲノを思ひ切れと勸むれども、ゼンマ固く執ツて聞かず。院主怒ツて、他の尼等に命じゼンマを捉らへて罰せんとする。恰も此の刹那、上手舞臺裏に人聲騒がしく、ダンテ、ベルナーデヲノ等、人數を連れて、こゝに闖入し來たり、ゼンマを救はんと、尼等と押問答などある所へ、更に此の企を聞いて馳せつけたる、チロの一隊あり。戸外の騒擾に尼等は恐れ遁れる。ダンテの手のものは防ぎに赴む

き、舞臺にはダンテとゼンマとのみ残る。ダンテ急ぎてゼンマを神壇の前に隠す間、はや寄手のものも亂入する様子に、ダンテも續いて神壇の前に潜み、絞つてある幕を内から引く。同時に上手口から敵の手のもの抜刀にて入り來たり、方々を捜す氣持、刀で隅々を試し、さして神壇の所に及び、幕を隔て、二刀三刀さし通して過ぎる。其のうち追ツかけてダンテ方のもの入り來たりちよつと亂れ合ツて立ち廻りあり。敵を追ひ出して、戸をしめきると神壇の前のカーテンを分けて、ダンテがゼンマの手を引きあらはれる。此の時のダンテは囊の刀で胸を刺された體で、顔も一層蒼白く、よろめく氣味で出る。急ぎベルナーデヲノを磨き、ゼンマを連れて下手口から遁れさせ、二三の人數をも其の跡に従はせて、さて自分ばかりの前に尻居に身を落とすと共に、息切の體で胸を掻きくつろげ、血の流れた跡を

見せ苦しき思ひ入れで幕。日本のそこらの芝居でも見てゐる氣持。蓋しメロの大なるものである。落ちついた藝の見所殆ど無し。強ひて褒めるものは、當時小園擾の到るところに絶えざりし伊太利の状勢を此の場でよくあらはしてゐるなどと、苦しい理窟をつけて居る。

三幕目七場より成つて、ダンテの地獄巡りを見せる、觀せ物的の大仕掛である。第一場、ダンテが終生精神的戀愛をつないだといふ、ピアトレスの墓のある地、カンボ、サントの夜景。『神曲』地獄の卷の書き出しに「我れ浮世の道のさ中にて、暗澹たる森蔭深く行き迷ひぬ」とあるを利かせて、深山の遠見、ダンテは今、ピアも死し、ゼンマの生死すら知れず、浮世に倦みて、自殺を思ひながら、此の墓地に徘徊しゐる。舞臺は有るか無きかの明りにして、僅かにダンテの臺詞で、其の影を

目探するくらゐ。前幕の末で、ダンテは死ぬることゝ思つてゐた連中は、是れを見て多分ダンテが幽霊になつて地獄へ行くのであらうと眞面目に言つてゐたのも無理はない。併し作意はやはり生きてゐるダンテで、其の地獄巡りは、夢のつもりでも勿論ない。作者は之れを不即不離なるミステシズム、シムボリズムで統一した積りであらう。而して此の計畫が不成功であつた所以は前に論じた通りである。此の以下の七場が前後の寫實と調和して、一團の感銘を與へると感じたものは、恐らく見物の中に一人もあるまい。下手に寄つて、小高い所に、忽然一團の白光が射すと、其の中にピアトレスの白衣の姿が浮いてあらはれる。ダンテが自殺の述懐を谷めて、神の大法は此の世のみにては測るべからず云々の臺詞あり。ゼンマの行方は他界にてピアに會はざらん、羅馬の詩人ブーヅル

を案内として他界を一巡すべしと告げる。此の間ピアトレスは端然として立ちたるまゝ動作なく言葉の調子は莊嚴を旨として稍々棒讀のおもむき。ダンテには別に記する程の事なし。

ピアトリスの姿が明りと共に消え失せるとダンテが感動の臺詞一寸あつて今度は上手奥のかたに同じ仕掛でヴァーシルの姿があらはれる。ダンテが其の方へ行きかける所で黒幕。

すぐ變はつて第二場地獄の門此の場も他の五場と同じくすべて微かな薄明で劇場内の灯火は勿論みな消して見物は此のあひだ全く暗黒中にゐるのである。地獄の門は上手正面に隧道の入口然たる

大アーチを岩石巍々たる中に穿ち下手半分の正面は岩石のちどまツた間から連山の遠見明るい遠空を見せ門の上には例の地獄の巻第三節の句一切の希望を抛てよ汝等こゝに入る者といふのが掲げ

てある。ダンテとヴァーシルとがこゝに来るとすぐ道具變り。

第三場シャロンの渡舟是れも地獄の巻第三節の光景で東洋の地獄ならば三途の川といふところである。シャロンが櫂を構へて立つてゐると色々の亡者が悲恨の聲を挙げながら其の舟縁に攀ち來るのを拂ひのけるなどの趣を臚に見せダンテヴァーシルは此方の岸に立って問答の臺詞など原詩の意をさかせやがて例の通りばつと舞臺を暗くすると道具が變はる。

第四場焦熱の墓背景に火炎を見せ荒原の所々に土饅頭の形二人がこゝへ來るとまづ下手の墓がおのづから口を開いて中から模造の燭と共に亡者の形相が半身をせり上げ來たる。ダンテは戰慄してヴァーシルに何者ぞと問ふあひだまた上手よりも中央よりも同様の形が見はれ現し世にありての悪業仲間なるアギノンの牧師長コロ

ンナが五月六日の午後六時に死し、此の焦熱地獄に來たるべきを豫言する。是れは次の幕の伏線、で原詩第十九節なる法王ニコラス三世の事を、舊教徒を憚つて脱化させたのだといふことである。

第五場、氷の地獄、これは原詩三十二節以下の景を本としたもの、岩石大地、すべて氷柱と氷とで、斜めに一條の路を残して、舞臺奥の方は一面の湖水に、厚氷の張りつめた趣き、空からは光線の影を使つて、氷塊の絶え間なく降る景を見せる。それが小息になると、ダンテ、ヴーシルが岸に臨んで見やる湖水面には、無数の罪人が首ばかりを氷の上に出して、うめきゐる。すぐ變つて。

第六場、石橋二人が巖石の橋に來かゝると、下手奥の紫が、うつた空の遠景に鮮かな星が一點二點名のりを舉げてゐて。地獄の巻の結尾及び淨罪界の巻の首の句意を見はして、地獄界が茲に終る情景を示す。それで愈く。

第七場、アスフォルスの谷に入れば、淨罪界の趣き、上手奥から山の裾を見せて見わたす限り、谷間は新緑の草柔かに、百合の花咲き亂れ、奥深く行くに従つて、光線を強くしたる道具、立種々の亡者の二人が前をゆるやかに往き復りする中に、ピアの姿もあらはれ、ダンテと名のり合ひて、ゼンマはベルナーデノと共に囚へられて、アギノンにあり、今裁判中なりとの旨を告げ去る。

ダンテは肅然として、天を仰ぎ、大正神明にして慈悲無量なる天帝、願くは我れを導き給へ、窮しては却つて神に非禮を加へたる我が凡夫の罪を赦し給へ、といふ意味の臺詞を述べ、此の時、山のあたりから、唳朗の樂につれて、羽衣の天人降り來たる。幕。

尙ほ以上の七場は、いづれも其の場、其場の情に應じて、極靜かな音樂

を、オーケストラで奏する。是れが或度まで幻想を助けて、唯の祝からくりで墮するのを防いでゐるのは言ふまでもない。また種々の史上の人物にて『神曲』に出てゐるもの、及びバオロ、フランチェスカ、ウゴリノ、ルゼリ等も右七場の中に見はれて、原詩の句をまじへた臺詞を言ふ。フランチェスカは即ち前に抄した句をこゝで述べらる。さて以上の一幕は、劇としてよりも、其の道具書割の機械的方面に力を盡すことが、如何に極端に達したかを見る點に意味がある。また一方から言へば、此等は、他の二三の現象と共に、大陸オペラの趣味が英國では劇の中にまじつて來てあるものと見てもよい。正劇の想の超自然的なるものあること、ミュージカルプレーの行はるゝこと、道具書割の壯麗をつくすこと等、是れである。併しこれが果たして續くべき傾向であるか否かは別論に屬する。

四幕目、アギノンの法王宮大廣間の體、正面オービーの方に寄せて一間の出入口、あとは伊太利式の廻廊の四柱を見せ、中程からビー、エスの方にかけて、廻廊を透した見晴し、南國の日光強き市街を瞰下したる景。こゝに使ふ市街の遠景は、劇中の人物、ダンテの知人なる畫家ジョットの原畫を寫したものである。室の中央には、玉座に擬した椅子を置き、ビー、エス即ち上手の壁には、一基の大時計が仕掛けてある。幕は罪人裁判の模様で明く。二番目にはゼンマ及びベルナーデッノが呼び出され、瀆法の罪に問はれて磔殺の刑に定まる。當人等の驚きは言ふに及ばず、下手に立ち并んでゐた傍聴人の中から、ジョット等が進み出て、減刑のことを嘆願する騒ぎの中に、下手背口から二三の從僧を率ゐて、牧師長、コロンナ出で來たり、判官の僧が譲りし席に着く。此の人物は本來彼の史上に有名な亂行の法王クレメント五

世を出したもののなれど是れまた舊教徒を憚って別の人にしたとの事。コロンナが疲弊の體で投ぐるが如く椅子に身を沈めるとゼンマ・ベルナーデノ及びジOTT等其の椅子に取り絶つて哀れみを乞ふ。コロンナはうるさことの介にて之れを斥け罪人を上手廊下口から引き出さす。ジOTTが尙ほも掌を合せて恩典を願ふ所へ上手口からダンテ深く何事かを思ふ體又深く神明の畏に打れたともいふべき様子で出で來たる。蒼白にして嚴肅なる顔を少じうつむかせ兩手を組み例のモンク頭巾に櫛色の長衣をすぼめたる肩より掛け此の世の人にあらぬが如き足取にて現はれるさまは是れだけで舞臺が始めて森となる。蓋しこれらはおのづから名優の體に具つた威徳で場の上るや否や言はず動かざるに早や咄々人を壓するの光彩を發射し來たるものであらう。

ダンテの玆に來た目的は娘等の成行を知らんとすること、コロンナに恰も今日午後六時には絶命して焦熱の地獄に墮すべしとの事を知らせ、少しにても悔悟させんとすることである。ダンテといふ叫び聲を聞いて、コロンナは驚きのあまり半身をすべらせんとして振り向き顔見合す。ダンテは此の時靜かに立ち寄つて椅子の横手うしろに佇めり。コロンナは病弱の上に今ダンテが森嚴なる面持に畏れを感じて手足の震ふ體二人の間答になりて、ダンテは靜かなる、而も力ありて憂鬱の氣に満てる調子で自分が地獄のさまを見且つコロンナの黨類から聞いた彼れの運命を語り、今日は恰も其の死期なり、せめて生前しばしが問なりとも身の悪業を悔ひよと、おごそかに言ふ。コロンナは動願して恐怖の體に、聲ふりしぼり或はダンテにすがり或は神に哀れみを乞ふなどの大芝居あり。玆に到つて、最

も妙と言はるゝは、彼の柱時計である。針は正に午後六時の前數分を指して、其の下に添へたるは、時を權化したる寓意像、あてどなく眼を見張りて手に持ちたる鎌を、一秒毎に動かす。(此の圖は能く人の知る所で、近くは英の長老畫家ワッツが大輻時死判決の中の時像など其のまゝである)是れと時計とが不思議に此の場を引き締める綴ぢ目となつて、コロンナが狂ひつかれて、ちよつと靜まると舞臺の森とする中へ明かに時を刻む時計の音が聞こえる。何人も眼を其のかたへ外らすと、凄いアブストラクトの眼をした右の像が、刻々に鎌を振つてゐる。一種凄愴の感が場を覆ふ。つまり寓意畫と時計といふ道具と其の場の燒點的感想とを巧みに綜合し活用して、作者の技巧としては、篇中第一の出来となつたのである。

コロンナが狂ふあひだ、他の人々は、遠く離れて立ちたるまゝ、懼れ驚

くこなし、時々あり。ダンテは始終即かす離れず、コロンナの藝を受けるだけの白介。やがてコロンナは恐れ狂ひながら、ゼンマ等の死罪を赦すゝと叫ぶ。ジオット之れを聞いて、臺にゼンマ等の引かれし方へ駆け出し、兩人を連れ來たり、ダンテに引き會はす。同時に時計は六時を報ずる。コロンナは、嗚呼、六時、嗚呼、六時と叫びながら、時計の前に身を投げ伏し、其のまゝ息絶える。皆々立ち寄る。ダンテは立つたるまゝ、ゼンマとベルナードの頭を抱き寄せ、二人の顔を見おろして、淋しき喜びの見え、危き命助かりしを祝ふ臺詞にて幕大尾。

以上の芝居に對して、記者は冒頭に掲げた如き結論を得たのである。

(明治三十六年十二月五日稿)

附言、英國の俳優については、ツリー。アーキングを紹介したか

らせめて、今二人、ウヰンダムとエレン、テリーとを書いて置きたいと思ふが、餘り芝居談がつよくから復の折に残す。また劇そのものから言へば、英國劇の精華として、他國の及ばぬ所謂イングリッシン・コメディーの妙味を説いた上でなくば、本當に英國の芝居を紹介したとは言へない。是れも他日の事。



英國の小説界

(上)

申すまでも無いのであるが、外國文學の現況を知らうとするに最も困難なのは、其文壇全體のパーヅ、アイ、ゴーを得ることである。此の背景が出来てゐなかつた日には、下手な繪を見ると同然物の高低が分からないことになりす。併し此のパーヅ、アイ、ゴーの背景を作るといふのが、一寸骨の折れる事であり、つまり現在を知るは過去を知るよりも難い譯になるのです。



日本文壇目下の流行は總じて何とかの大勢と言つたやうな事に亞米利加流の大げさな感情の文句を詰め込んだのでないといふ、人氣に投じないといふ様子ですが寧ろ急務は其の土臺となつてゐる事實を知ることです。文壇全體若しくは思想界全體の地理を知つた上でなくては、富士山と筑波山の高低を論じたツて駄目でせう。富士山の事を書いた物を讀めば、富士山が日本の真中にあるやうに思はれ、筑波山の事を書いた物を讀めば、筑波山が日本一の名山のやうに思はれる。それは書くもの讀むものゝ人情ですから、自分で眞の智識を得やうとするには、此等のものゝ比較の出来るやう、先づ其の國の全圖から心得てかゝるのが順序です。日本の外國文學研究にも此の方面の工風が大に必要と思はれます。其所で、自分が茲に書くのも、右の助けになるためといふので、自然見

ばえのしない事實にわたります。併し議論も少しは加へて置きます。

英國の詩壇については、人の上から大體の事を他項に書いた筈ですが、小説界を之れに比べますと、勿論範圍も廣く頭數も非常に多い。玉石混淆にもせよ、一年に何千といふ新作は多すぎて却つて小説の前途を害する小説は是れがために詩の迹を追うて衰微し行くの恐れがある、なごいふ議論すら新聞雑誌に見えて、殊に亞米利加邊の雑誌では斯やうな議論が多いやうです。併し小説の前途が果たして衰微であるか隆盛であるかは別として、歐洲の小説界少なくとも英國の小説界が目下質に於いて沈滞の狀であることは事實です。數ばかり多くて物がわるいといふ形ちです。是れには固より種々理由のあることでせうが、ざつと申さば第一英國といふ國が人も知

る通り昔から知情両面の均衡を保つに長じた國民ですから、文明の潮ざかい、知情の背反新舊の衝突と言つたやうな革命的時勢には、何時でも跡にひかへて、じつと自重して待つてゐる。而して徐々に利害を観察して、利に就き害を避ける。傍觀者、研究者としては、最もワイズな國民であることは、例の佛蘭西革命でよく分かつて居ます。今日の歐洲大陸が直ちに革命に瀕してゐるとは言へないのですが、兎に角或る飛躍を爲さざるを得ない形勢に直進しつつある、それは宗教、道徳の上に見て明かと思はれます。そこで英國は例の通りじみに構へて、其の成り行きを待つてゐるに反し、大陸は盛んに其の活氣を揚げてゐる。是れやがて英國の現文明と大陸の現文明と、何れが前にして何れが後なるかといふ點に二様の見かたがある所以で、本來英國と大陸との文明比較といふことは種々の方面から解せらる

べき大問題でせうが、右の點が其の一解釋であらうと信じます。言葉をかへて申さば、革新の前に必ず破壊ありといふ大陸主義、佛蘭西主義からいへば、彼等が革新に着手した時は、即ち破壊の始まりで、進歩の前には退歩ある彼等の特性から、今日の宗教といひ道徳といふものには、寧ろ退歩、破壊の現象を呈してゐる。即ち國民の氣品からいへば、英國の文明が遙かに大陸よりも高いのでせう。併しそれと共に大陸の破壊退歩には、進歩のためといふ活氣を有してゐる。老衰の退歩でなく、若が入つた亂暴であるから、之れを導くものさへ善かつたらば、やがて立派な新文明が是れから生まれて來やう。但し萬一を誤まつたらば、佛蘭西革命と同じく、千歲補ふべからざる慘害を蒙つて、其の創痍なほ癒わざるに、早くすでに次の革命を呼ぶといふ如く、長しなへに狂熱に疲れて、遂に全く其の組織的存在を時空の

間に留めざるに至るかも知れません。

其れは別問題として、兎も角も目今の大陸思想が活氣あるといふこと、随つて感情の發露も英國より遙かに自由なといふこと、此れが大略文明の一面英國よりも進んで見ゆる所以で、是れはやがて文藝の上にも最もよくあらはれて居ります。文藝の上からいへば、今日の英國は大陸の下にあらむ事否難き事實のやうです。無論當國の人みづからといへども、是れは認められてゐるのです。

併し英國は決して無意義に傍觀してゐるのでないから、少し見さかひがつくと、直ちに其の入用な部分だけ吸収に取りかゝる。斯やうにして、他が過度の活動につかれてゐる頃には、跡から來た英國が却つて新文明の眞つ先に立つといふ始末になるであらうと思はれます。近き過去はさうであつたかと思ふ。つまり英國は此の意味か

らいふと、文明の完成所、仕あげ所といふことになり、斯くして一旦新文明がこの國に根を下すと、それから此の國の文藝の光彩を發つ時期になるので、此の國の文藝は結局常に完成した歐洲の文明に應ずるものといふことになります。我等は次いで來たる英國の文藝が如何になり行くかを此の理によつて見やうと思ふものです。また右の一理由からして種々の特色も出て來ます。例へば、ヂツケンス。エリオット等の流れに漲つた一道の現實思潮社會的にも科學的にも、文明の進轉と共に漸く感情と離れると共に、英國に取つては頗る不得意の秋とならざるを得なかつたのでせう。大陸では此の缺陷を補うて感情を迎へる方法に窮しない。佛國は例の巴里流に思ひ切つた所まで行つて、動搖し彷徨してゐる感情に乗ずることを知つてゐます。獨逸も其所に抜目は無いやうで、寄席にもせよ、

伯林の眞中で、レデーが着物を一枚一枚脱いで行くといふのが、舞臺の客寄せとなつて怪しまれぬ世の中ですが、併しこゝには獨逸獨逸の長所もあつて、夫の哲學的乃至超自然的なローマンチックの趣味で之れを維持して行く。言はゞ獨逸得意の時代と言つてもよいのでせう。それと共に斯やうな意味でのローマンチックは極端なポエチカル即ち想の上からよりも情の上から被せ懸て了うといふ傾向ですから、多數人の想像にのみたよることは不得策になります。直接に感覺から情に訴へ、四圍の空氣をまで其の情で染めて置かなくては損の作物です。随つて此等はむしろ音樂詩劇乃至此等の結合したものに最もよく適して、小説には却つて不適當といふ結果に陥る。大陸小説の振はざる所以を論ずる日があつたら、其の出立點の一は茲にあらうと信じます。而して英國が將さに傾き來らんと

する方向も是れにあるかと思ひます。佛國流は到底英國の堪わ得ない所で「モンナ、ワンナ」の興行の禁せられたのも、當局者の趣意は其の獨逸的なるがためではなく、巴里流の方面を嫌つたのでせう。さらば英國は此の新機運に對して指を咬へて引ッ込んでゐるかといふに、さうでは無いのです。右の缺陷を補ふためには芝居では奇蹟劇の復興も試みるし、小説では歴史小説も説かれるのですが、是等は何れも未成功です。最も成功に近かつた英國文藝の新方針は、スチーヴンソン流の趣味で、スチーヴンソンが今日まで生き延びて居たら、此の潮流が今少し顯著になつたかも知れないのですが、此の作者以後には、次いで興くるものが無く、徒らに摸倣の人のみ多くて、却つてあらぬ方に之れを導いた氣味です。但しつまり此れは、作中のアドエンチユアスを趣味の中心とするのですから、若し是ればかりを

主とすることになつたら誰れが書いても空なもの、粗なものになつて、やがては底が出て、世に飽かれるでせう。天才が巧みて之れを用ひれば、功をなすのです。ローマンチックといふ語は重寶な語で、此の傾向をもローマンチックと或る人は呼びます。今日の英國小説の多數は粗なる冒險談を生命とするか、然らずんば蠟を噛むやうな心理解剖、社會研究といふが如き窮境に陥つてゐるのです。向上一路の縁がまだ熱しないのでせう。要するに小説は文藝の中でも最も現實生活に材を假ることの多いもので、殆んど現實を外にしては大なる作妙なる作は出來ないのですが、其の現實生活が前にも申した如く、最早爛熱の一段落にでも達したといひませうか、生活の内容が大抵手ずれてしまつて、馴れて、珍らしく無くなつて、趣味の材料とならなくなつた今日、小説はむしろ不便の地にあるものでせう。隨

つて、社會が一進轉をして、現實生活の内容が再び豊富になれば、其所に再び小説も活氣を帯びて來るのです。勿論如何なる作者でも、自分一個の天地を有してゐないものは無いのですが、それを具象させて出すには、やはり現實の材に縛られるのが常です。若し此の際に現實を脱出せよとか新造せよとかいつたら、其れはユートピアか然らずんば、全く作者の抒情や主張の形ちで具象せずに出て來なくてはならないのです。さうなれば小説よりも詩や樂劇の方がよくないので。トルストイの晩作などは、殆んど監獄志、罪惡研究誌、良心復活論といふ氣味です。世の之れに對して稱讚の聲を揚げる者は、七八分まで道德上の意味が籠もつてゐるでせう。文藝としてのエンターテインメントは至つて乏しい。我々は二度讀みかへす勇氣は無いです。今度英國の左團次ともいふべきピヤボム、ツリー(是

れは藝風の上からにあらず地位の上からです、尙芝居の事は前節に述べました、此の作を巴里から持つて来て演ずる筈ですから、何んなに仕いかすか見ものです。

論が脇道にそれましたが、今ひとつ、たとひ大體に於いて右の如き論断は下しましても、新天才が出れば、みなそれ、特殊の眼孔を持つて世を覗くのですから、そこに多少の新天地を發見し來たるは言ふまでも無いのです。随つて今日の英國小説といへども、過去に於いてもはた當來に於いても、全く捨てて顧みないといふ理由は決してありません。キプリングあり、バーリーあり、老いたりといへども、レヂスあり、ハーデーあり、ゼームス(英米兩屬)あり。歐洲の流行に比べて見榮えのせぬといふまで、離れて見る我等から、乃至百年の後、の靜かな比較鑑賞からは、必ずしも一概に英國小説の今日をのみ外

にする譯はないのです。英國小説には英國小説の奪ふべからざる特色があつて、例へて申さば大陸の小説は概して罪惡廣義の後の人間を描き、英國小説は概して罪惡前の人間を描く。前者にあつては初發情のために理を破るは極めて容易に而して、のちの煩悶が作の中心となれども、後者にあつては、其の初めて情のために理の破れるまでの葛藤が中心となるといふ趣があります。言ひかへれば、一は感情のために理性の敗れることの如何に容易なるかを寫し、他は感情の爲に理性の敗れることの如何に難いかを寫すのです。そして前者は直に一層廣い道徳を持つて來て、其の罪惡の原因に是認を與へる工風をすれば、茲に所謂小道徳を破つて大道徳を建てるといふやうな譯にもなりますし、後者は飽くまでも強健な現在の道徳的性格が情の責め木にかゝつて、もがきもがいて、危機一髪の際に踏み

止まらうとする壯嚴な様を書くことにもなります。日本の多數は  
 どちらかといへば大陸風でせう。随つて其の哲學的な工風の廣さ  
 深さが足りなければ唯の佛蘭西流や無意味の暗黒小説に了る恐れ  
 があります。

## (下)

さて英國の小説界で昔の作者のうち上下に推しなべて敬愛せられ  
 るのは言ふまでもなくテッケンスに如くなしです。續いてはスコット  
 物が稍俗向きに人氣があるやうです。  
 現在の作者では先進といふ點から先づメレヂス。ハーデーと連稱  
 するのは丁度日本で紅葉露伴と言ふやうなものです。勿論是れは  
 作柄の上の比較や順序では無いのですから斷つて置きます。まづ  
 言つて見れば作の價値に年齢をかけ合はせ更に出身の順序をかけ

た其の積とでもいひませうか、漠然出來て來る文學社會の一種の地  
 位です。日本も同じこととせう。年齢から言へば日本の諸君は先  
 進といつてもまだ皆壯年であるから是れからが働き盛りです。之  
 れに反してメレヂス。ハーデー等は既に頽齡に近づいてゐる。メ  
 レヂスは當年七十七歳、露西亞のトルストイと同齡です。ハーデー  
 は六十四歳、死んだゾラと同齡です。  
 メレヂスは初作が今から殆んど五十年前傑作といつても『ゼ、オーディ  
 アル、オブ、リチャード、フワレル』が四十五年の昔、『ゼ、エゴイスト』が二十五  
 年の昔ですから何と言つても英國小説界の元老です。一般には其  
 の作は讀んでも面白くない分らないといふ批難ですが、文學的に  
 は勿論價値を認められてゐる。先頃も去る文學會で、エリオットとメ  
 レヂスと何れが性格を描くに巧みなりしやといふ討論で、結局はエ

リオット側が七十一人に、メレヂス側が十五人、是れはメレヂスの敗に歸したのですが、兎に角以て其の地位を見るべしです。

ハーデーは初作がたしか三十八九年前、併し其の傑作を『テス、オブ、ゼ、ダーバーギルス』とすれば、是れは十三年前で、割に新しいのです。此の作は、例の博愛かたぎ、樂天かたぎの強い一部の英國人から根本思想に批難を受けたのですが、全體からいへば、此の作者は癖の少ない風です。尙ほ右の作は、今度梅澤和軒君が早稻田の文學叢書の中に翻譯されると聞きました。

年配の上から言つても、次にはヘンリー、ゼームスを挙げます。六十一歳で初作が三十二三年前傑作を『ゼ、ポストニアンス』とすれば、是れが十八年前です。併し此の人は老いてますます、壯とも申すのでせう。尙ほ續々名譽の作があります。別項に述べた去年の新作『ゼ、ウ、

ングス、オブ、ダヴ』の如きが即ちそれです。スチーヴンソンの筋や出來事の組み合はせに重きを置く、其の意味でのローマンチック派に對して、寫實派解剖派の例に引かれたのは一昔ですが、今なほ其の方面に雄を稱してゐるのです。例の比較を假りたら、柳浪君などいふ所でせう。聲望若しくは人氣の上から或る部面にメレヂス。ハーデーと對して數へられるのはホール、ケインです。併し其の作柄は、どちらかといへば、少し俗向きの氣味が多すぎます。隨つて其の賣れ高は太したもので、七年前に出た『ゼ、クリスチアン』是れは一時看聽婦社會の反抗を招いて名高かつた作で、二三年前の計算に二十萬部以上の賣れ高、また傑作の一と見るべき『イターナル、シチー』が一昨年の作で、十萬部といふことです。此の作者はアイル、オブ、マンの島に住んでゐて、容貌がシェークスピアに似てゐると言はれるので、一寸氣取つ



て見たくなるといふやうな、無邪氣な逸話のある人。當年五十一歳で初作が十九年前、日本ならば水蔭君でもあるまいし、眉山君でもあるまいし、南翠君の世盛りとでもいふ所に持つて行きませうか。それから闊秀作家で例のツォード。五十三歳で初作が二十二年前傑作を『ロバート、エルスミア』とすれば、是れが十六年前にあたります。作柄は寫實派、心理派の側で、今も尙ほ活動してゐる、先づ此の國での女作家の先達です。そこで花岡女史ともいひませうか。五十代の作者が是れでざつと一段落ですが、四十何歳といふ所で、少し方面が變つてコナン・ドイル。探偵小説の本家といふ趣きですか、やはり涙香君を假りて來るのがよいでせう。歳が四十四で、初作が十七年前『アドエンチュアス、オブ、シャーロック、ホームズ』を代表作とすれば、十二年許り前です。

探偵小説で想ひ出すのは此の國の刑事事件の殆んど全く小説通りなのがあることです。日本でも天羽何某といふやうな事件には、随分深い秘密があるのでせうが、概して言へば底が淺く、眞の疑獄といふやうなものは割りに少ない。是れは一つは調べる方で手が届くのもあらうし、また悪人の方が淡泊なでもありません。第一英國の裁判には、日本流の眼から見ると、餘程大岡捌き流の大やうな所があつて、道德的、宗教的な所が多く、それで罪人の方では、又隠すとなれば偽善的に知慧を凝らしてかゝるから、餘程公廷が芝居がよつて來ます。目下當國で注目を中心となつてゐる疑獄の一は、近來稀れなものと言はれて、何うしてもシャーロック、ホームズが出なくてはならない幕となつてゐるのです。それはビーゼンホール殺人事件と言つて、倫敦の東北にある小村で、下女奉公をしてゐた村内評判の美人

のハーゼントといふのが去年大あらしの夜奉公先の臺所で懐胎三月のまゝ殺されて火をかけ焼きすてられやうとしたのですが、火は消えてしまつた。側にこわれて居た瓶の張紙と女の手箱から出た手紙、其の夜十二時に女の寢間の窓から燈火の動くのを合圖に忍んで來るといふ手紙の手跡とから犯人は村での名望家、大工のガーヂナーといふに極まつたのです。所が裁判になると、反證も出て、横戀慕の道化役も出る、匿名の自首書が來る、細君の貞實立て、村の人氣、遂に懐胎の子は誰れのも分からなくなつて、十二人の審判官が有罪無罪を定め得ず、未決に了つたのが去年の冬でした。此の一月審判官をかへて更に開廷し、またく有罪無罪兩説に分かれて落着せず、更らに第三回の審判官によつて此の夏開廷との事で、地方の新聞社は義捐金を募集して犯人の辯護費にあてゝ居るといふ景況です。

細かい筋がどうしても小説ですから、其の内機會があつたら右の公判筆記を譯して見ませう。検事の一人がチッケンスと言つて、夫のチャールルス、チッケンスの子であるのも因縁です。序に今一ついへば、此の頃の裁判で見ものは先達つて死刑に極まつたかの愛蘭士の議員、義に勇んで杜軍に投じたといふカーチルリンシ大逆事件で、數十年來打ち絶えた壯嚴な式であつたといふことです。

また去年の秋、倫敦の繁華の真中郵便局の入口で、晝中にパイロンといふ若い女、シチー、レデーといへば、日本なら江戸ッ兒といふ所ですが、それが内縁の夫に見すてられる悔しさに取り上げて、後からナイフで一刀切りつけたので、男は腕く死んだといふ騒ぎがありました。裁判は死刑と極まつたが、女の言譯は、たゞ一筋に自分は決して殺すつもりでは無かつた。男の薄情が口惜しさに、赫として此に及んだ。

ので是れ程自分の惚れてゐる男を何うして本気で殺せませうといふのでありました。すると此の言譯が戀に浮身をやつす倫敦のレイディス等にひどく氣に入つたものか何うか非常に市中の同感を惹いて死刑減等の嘆願書を國王に出すといふことになる。方々の出張事務所に詰めかけて其の願書に調印したものが一朝で二萬人に及んだといふことである。それで死刑は減せられた。こゝらは何うしても開化した江戸という氣味かと思はれます。

話が飛んだ所に外れました。

ハガードといへば少し當たりませんが、弦齋君を并べませうか。一方の名將で、四十八歳、初作が二十三年前、「ピアトリス」を代表作とすれば、十三年前に出たのです。

更に方面をかへて、年齢から言つても大抵四十歳以下、技倆から言へば、英文壇の將來を左右する者が此の中から出るといふ所を見ます。と、矢張り先づキプリングが三十九歳、露西亞のゴルキーよりも二歳の兄、伊太利のダンメンチオよりも一歳の弟、印度で雑誌記者をしてゐて、初作が十六七年前、「ソルデアリス、スリー」が十四年許りに出て、「キム」が一昨年出たことは、誰れも記憶してゐませう。此の作者は印度で生まれて、濠洲から支那、日本へも旅行したことがあつて、殖民地から本國の文壇を撼かしたのです。例の帝國主義的の覇氣で、折々書き過ぎをする。先頃も「ゼ、タイムス」の紙上に今度のエチジュエラ事件に獨逸と聯合したのが不平で、獨逸を「無慚のハンス」と罵つた詩を出し、物議を引たのですが、早速獨逸の詩人からは印度の大鼓叩きといふ嘲罵を受けたさうです。此所等はむしろ好漢愛すべしの方でせう。

パーリーは寧ろ脚本に目下の名聲を集めてゐますが、小説の軽いものに本領があるらしいのです。四十四歳で初作が十五年許り前代表作を『エウランドウ、オブ、スラムス』とすれば十二三年前です。

アンソニー、ホープは歴史小説家ともいひますが、つまり中古物で賣り出したからで、四十一歳初作が十三四年前、九年許り前に出た『ビ、ブリゾナー、オブ、ゼンダ』が中古物を世にはやらす導火となつた程の人氣であつたのです。併し斯ういふ向きのは動ともすると、俗受けの方に這入り易いのです。

日本では天外宙外鏡花風葉等の諸君が此所等の地を占めてゐるのですが、比較はわざと省きます。

其の他俗向きと見られる作者では、人氣は太したもので書物も十萬二十萬と賣れるのがあるさうです。例へば女作家でメリ、コレリー。

其の『マイチー、アトム』を讀んで自殺しかけた牧師の件がありました。同じく女作家でヘンリー、ウッドの『イースト、リン』は非常な賣れ行きだとの評判です。尙ほ通俗作者のことは其のうち別に書きませう。文壇的作者でもコンラッドであるとか、マーガレット、ウヅ女史であるとか、まだ漏れたのがあります。またどちらに這入るか眞價の分らないのもあります。此等は追々書くことにしませう。

(明治三十六年一月二十七日稿)

## 英國詩宗

小説界に比して詩壇の落漠たるは、近時世界の大勢といつてもよからう。此の英國に於いても、先年テニスン(Alfred Tennyson)詩宗の逝いてより、僅かに一スキンパーン氏(Swinburn)を刺すの外、未だ見て以て

一代の泰斗といふべき詩人をも得ざれば、人心を傾倒する程の詩篇をも得ない。

今年に入つてより、兎も角も詩宗 (Poet Laureate) の詩集といふので批評家の筆に上つたもの、オースチン氏 (Alfred Austin) の『誠の戀の物語』 (A Tale of True Love) 一篇あれど言はぶさしたるものならず。玆には殊さらに此の詩集を細評するの勇氣も無い。試みに一新聞評家の結論を擧げて、其の一斑を示すに止め、進んで此の作家の身の上より、英國詩宗の歴代と現時に於る此の國詩壇の概勢とに及びたい。四月の『デーリー・テレグラフ』といへば、既に見た人もあらうが、此の新聞の評が最も肯綮にあつたものかと思ふ。其の言ふ所を一括すれば、オースチン氏が『誠の戀の物語』と題した此の詩集は、全然讀者を失望せしむるものであつた。『誠の戀の物語』とは、集中の一長篇の名

で、それをやがて集の名に冠したものであるが、むしろ比較的によいのは、他の短篇にある。併しそれとても平凡といふを免れぬ。此の作者のものとしてすら凡作たるを免れぬ。由來此の作者は、修辭の術に於いて必ずしも人後に落つる人ではない。唯詩の第一義は彫琢の外讀むものをして覺えず、神駭き魄蕩く底の興奮を感せしむるにある。オースチン氏の詩は之れを缺く。さて集中より面白しと思はるゝ一二節を引き來たり終りにスキンバーンの舊作中より其の高調子なる一二節を抜き、相對比して、推讃をスキンバーン氏に歸してゐる。

想ふにオースチン氏の長所は細を歌ひ、優美を歌ふにある。自然を寫すを其の長所と斷じた評家もあれど、自然といふ中にもおのづから制限あつて、自然の高所大所は遂に其の筆に入らぬらしい。長さ

よりいへば短いものがよく情趣よりいへば可憐なものがよい。其の舊作中傑作の例として常に擧げらるゝ『みな月の一夜』(“A Night in June”) をここに紹介すれば

Lady! in this night of June,

Fair, like thee, and holy,

Art thou gazing at the moon

That is rising slowly?

I am gazing on her now:

Something tells me, so art thou.

Night has been when thou and I

Side by side were sitting,

Watching o'er the moonlit sky

Fleecy cloudlets flitting.

Close our hands were linked then;

When will they be linked again?

What to me the starlight still,

Or the moonbeams' splendor,

If I do not feel the thrill

Of thy fingers slender?

Summer nights in vain are clear,

If thy footstep be not near.

Roses slumbering in their sheaths

O'er my threshold clamber,

And the honeysuckle wreathes

Its translucent amber

Round the gables of my home:

How is it thou dost not come?

If thou camest, rose on rose

From its sleep would waken ;  
 From each flower and leaf that blows  
 Spices would be shaken ;  
 Floating down from star and tree,  
 Dreamy perfumes welcome thee.

I would lead thee where the leaves  
 In the moon-rays glisten ;  
 And where shadows fall in sheaves,  
 We would lean and listen  
 For the song of that sweet bird  
 That in April nights is heard.  
 And when weary lids would close  
 And thy head was drooping,  
 Then, like dew that steeps the rose,  
 O'er thy languor stooping,

I would, till I woke a sight,  
 Kiss thy sweet lips silently.

I would give thee all I own,  
 All thou hast would borrow,  
 I from thee would keep alone  
 Fear and doubt and sorrow.  
 All of tender that is mine,  
 Should most tenderly be thine.

Moon-light ! into other skies,  
 I beseech thee wander.  
 Cruel thus to mock mine eyes,  
 Idle, thus to squander  
 Love's own light on this dark spot ;  
 For my lady cometh not !

即ち全篇九解より成つて、精巧を極め、恰も六朝の詩を讀む心地がする。現詩宗たるオースチン氏の面目はこの詩によつて窺ふことが出来る。文體鮮麗也、抒情的也との評を聞くのは此等の例からである。予輩は右の以上深く此の詩人の一代を斷じ去るの準備と決心を持たぬ。たと反對の側より之れを見るものは此等の詩やがて其の凡才たるを證すとなし、何人も到るべく、歌ふべく、想ふべき凡境凡地に過ぎずとする。畢竟するに此の人が一躍して詩宗の榮遇を受けたるは、世の以て異數とする所たるに基づくのであらう。多きを求むればこそその不評であらう。

オースチン氏は當年六十八歳、スキンバーン氏よりも二歳の年長である。氏の大作家としては劇詩としての“Prince Lucifer”若しくは“The Human Tragedy”、“England's Darling”等名あれど、感興の深きは却つて前

掲其の他の短篇殊に戀を歌つたもの小歌などに多い。

氏はまた小説にも筆を染めて『五年』(“Five Years”)などの作がある。併し之れは大したものではない。要するに詩宗に叙任せられる以前の氏が名は詩人としても小説家としても未だ第一流として人口に上るものでは無かつた。ブリチッシュ、ミュージアムの圖書館目録中、千八百九十六年即ち氏が詩宗に叙任せられた年以前の氏が名の下には括弧の中に小説家其の他といふ註が通入つてゐる。それを右の叙任と同時に、あわたゞしく抹殺して詩宗と書きかへた所などは、前後の状態が思ひやられて面白。テニズンの死と共に詩宗の後任は何人ならんと萬人ひとしく瞳を凝らしゐる中にも、スキンバーン氏か、然らずんばラスキン氏かなど、衆評はおのづから歸する所ありしに、思ひかけざるオースチン氏が件の月桂冠を戴くに及んで、



流石の圖書館員も、今更の想ひをしたであらう。而して急にアルフレッド、オースチンといふ名の下を繰りひろげて見ると、單に小説家其他とのみ割註してあるので、其の一代の詩宗たるべき大詩人なりしことを知らざりし不明を耻づるが如く、倉皇之れを抹殺して、詩宗と書き直したのであらう。

勿論詩宗といふことが必定一代の最大詩人たることを證することは限らぬ。たゞ概して言へば、詩宗は即ち當代詩壇の泰斗、少なくとも一派一流の巨擘で無くてはならぬ。人のスキンパーン氏を推して寧ろオースチン氏を異とするは、此の點に足らぬ所があるからである。オースチン氏とても決して無下の小詩人では無く、テニズンにテニズン歴あるが如く、其の詩を挿んだ歴すら出來てゐる人ではあれど、詩宗としてはたしかに異數であつた。察するに氏はまた一面

雜誌記者として、論客として、殊に其の出身が法律家だけに、政治家としても相應に其の名の聞こえし所より、宮廷若しくは政府の選拔に多少の便宜縁故があつたのも一因か。

詩宗の始めについては、精確の歴史が無いといふことになつてゐる。ペトラルクやチヨースーの昔は、姑く措き、近世英國詩宗の始めは、夫のエリザベス朝のスペンサーで、千五百九十一年より年々五十磅の扶持を得たといふことである。併しまだ之れは叙任といふ程のものでなく、ダニエルを経て、ベンジョンソンに及び始めて公然の叙任を得、是れより長く之れが宮廷の一つの官職になつた。尙ほ初學の人もあつたらばと念のため、スペンサー以來の詩宗を列擧する。

Edmund Spenser (1591—99)

Samuel Daniel (1599—1619)

Ben Jonson (1619—37) (中絶)  
 William Davenant (1660—68)  
 John Dryden (1670—89)  
 Thomas Shadwell (1689—92)  
 Nahum Tait (1692—1715)  
 Nicholas Rowe (1715—18)  
 Laurence Eusden (1718—30)  
 Colley Cibber (1730—57)  
 William Whitehead (1757—85)  
 Thomas Warton (1785—90)  
 Henry James Pye (1790—1813)  
 Robert Southey (1813—43)  
 William Wordsworth (1843—50)  
 Alfred Tennyson (1850—92) (中絶)  
 Alfred Austin (1896—)

年を経ること三百人を更ふること十七其の間には全く埋没し去つて世人に忘れられた者も多い。一代の大詩人にして却つて此の人爵の外に超立した例も多い。詩人の眞骨頭よりいへば詩宗の職何ものぞ。詩宗シバリの死するや人あつて詩人グレーに推選の内意を通ずグレー辭するに詩は官職を以て強ふべきものに非ずといふを以てす。と史家は傳へてゐる。個人の縁故によつて其の後を受けたりたホワイトヘッドは今説くものも無い。併し之れは一方の例である。若し一代の文明を飾るべき詩宗の官職と、一代の眞詩人の價値とが合致したとすれば美はますく美を加へる譯で強いて之れを乖離せしむる必要は無い。スペンサーに於いて、ワーズワースに於いて、テニズンに於いて、皆例とすべきである。たゞ詩宗の職として昔は帝王の誕辰と新年とに必ず歌を上り、伶人をして樂に合はして

論はしめたといふ。是れらは誠に無用の業で、グレーの反對も主として此の點にあつたのである。幸ひにして此の事はバイを打ち止めに、サウシーの時から廢せられ、今では英國の詩宗は無職の官即ち榮彰保護の官となつてゐる。(尙ほ詩宗の事を見るに最も便宜且つ詳細なのはウキリアム、ハミルトンの「英國詩宗」(“The Poet Laureates of England”——W. Hamilton) また其の昔の事を推究するにはホースキンスの「音樂史」中の記事(“History of Music”——Hawkins)が常に参考とせられる。)

前の詩宗テニズンが恰も女皇ギクトリアと始終して所謂ギクトリア文明の花と立てられたに比して、オースチン氏はよく來たるべきエドワード文學の代表者となるべきか。そもくエドワードの英國文明はどうなるであらうか。皆大なる問題である。英國文明史

の花は多く女皇である。さればこそ今回の戴冠式騒ぎに、式場近かのウエスト、ミンスター橋の欄干が悉く歴代國王の像で飾られた中にも、天人の羽衣うつくしく中央に相對してゐるのは、エリザベスとギクトリアであつた。されど英國民が千古の盛事と誇つた戴冠式は國王病氣の故で頓挫した。輕卒なる者は早くも見て以てギクトリア文明の頓挫の兆とするであらうが、來たるべき英國の五十年は眞に眼を刮して見るべきものである。言ふことは、殆んど頂上に達したらしきギクトリア文明が之れから如何に轉するか、如何に活路を開くかといふことである。此の事は固より別論に値する。ギクトリア文學は詩壇にテニズンの外なほブラウニング夫婦を有してゐる。ロゼチ。モリス。マシュー、アーノルドの徒も、一流の人に推讃せられて、當代の飾りとなつた。さればギクトリア詩壇の特色

決して一様とは言ひがたく或ひは「ロマンチック」の一語を推して、殆んどあらゆる詩人を包括せんとした評家もあれば(Bates氏の如き)美術上のブレ、ラファエリッツといふ稱謂を一派の詩人に冠せんとした評家(Sainsbury氏の如き)もあり更に此等を別けてロマンチック、センチメンタリズムと呼び子オ、ロマンチズムと呼ぶが如き目を立てた評家(Sedman氏の如き)もある。此所には固より此等を論ずるといふにあらねど今日に於いて予輩の思ふ所を一言すれば此種の區別所詮十分のものならず歸する所は情派と知派との差異にして之れを詩の上に冠すれば詩は譬へば弦を離るゝ矢の如し之れを放つの弦はそれ情の力が此の點に誰れか異存があらう。たゞ豫め練ひ置くべき弓身を如何に。知は情を弱くす是れ一半の真理也。情は知の鹽梅によりて高尚となる是れ一半の真理也。此の關

係を如何にすべき。流派はやがて此の根本によつて別れるとも見られる。夫のロマンチズムの反動といふものは姑く措き予輩はテニズンを以て、むしろ十九世紀後半の容與たる英國紳士の詩彫琢あり修理あり哲學あり科學あり熱情なきに非ざれども常に反省に伴ふ一言すれば賢にして多感なる人の詩とするに與せんとするものである。従つて其の裏面には狂熱燃えるが如き態を缺くの批難も起こる。ロゼチやブラウニングやは若し言ひ得べくんば却つて之れが對岸の人か。而してテニズンは最も恰好なるギクトリア文明の代表者であるまいか。斯の如き形勢よりすればスキンパーン氏の今日は擧ろギクトリア文學の餘光として、テニズン以外注目すべき一の異彩たることが知らるゝ。詩宗オースチン氏の地位はされども遂に此等の潮流と緊

要の關係を有するまでに特殊でないやうである。俗人は戴冠式に就いても南亞の平和についても詩宗の詩の出ることを望んでゐる。併しそれは別の事である。予輩は思ふ若しオースチン氏が今日のまゝにして止まらば氏はたゞギクトリア文學のエドワード文學に移るべき中間の空位を埋める役に終るであらうが、さて來たるべき次期の文學とは如何なるものであらうか。

(明治三十五年稿)

### 雜事

#### ピンポン

目下當地に於ける流行の一つはピンポン(Ping-Pong)と申す遊戯に御座候。勿論すでに輸入致され居ることとは存じ候へども、つまりテニス、テニスとも申して、テーブルの上のテニスに有之、薄き革にて張

りたる團扇形のおもちやの太鼓の如きラケットにて杏の實ほごなるガムのボールを打ち競ふこと、ローン、テニスに異ならず、ピンポンとは其の球を打つ音に象取りし名なること申すまでも無く候。晚餐のあと食卓をかたづけてより、いざ一勝負と若き男女等の之れに立ちむかふこと、到るところの流行と見受け候。少しく雑踏を避けたる、しもた屋のダイニングルームに、瓦斯燈あかき雨の夕ぐれなど所謂ヤング、レディーやナイス、セントルマン等の晴やかなる笑語の聲にまじりて、ピンポンの音を聞くこと多きが習はしに候。此のものの極めて近年の流行とか。されば雑誌店頭を飾る際物類の小説詩歌中にも物思はしげなる美人がピンポンの音する家より二軒目の窓の前に、そと立ち寄りてまたはピンポンのテーブル形づけて、君がマツキントツシユ乾かしてなど物したるを見申候。

女の靴の踵ますく尖りて前にのめり男の靴の釦ごめのもの行はるゝ位は誰が目にも留まる流行に候へど賊のファッショナブルウェアの事は微妙にして我等の筆にまかせず。女の晴れ着の肩のあたり袖附に山の如く幾を盛むの流行すたれて其幾次第に袖口に下り近時には袖口の廣さ殆んど日本服の如きものを見うけ候以前一頃袖口の廣さものがはやりしことある由に候へど兎に角腕首の所に切れを用ふるの度がますます多く成り行くやうに候。まさかに日本の振袖と進化する過程にも有之まじきが實用と裝飾との動ともすれば相背き候こと何處も同じ候。男の不斷着にては、胴衣の二列釦専ら行はれ襟の明きかた段々狭くなり行きて殆んどホワイト、シャツの胸は見えず候。勿論此等は今更申すほどにも無

之候へど襟を高うする人々の心得にもと宙花君の領分を犯し申候。其他握手の禮が花車になりて舊の如く掌をしかと握り合ふ如き不器用のことはせず互ひの手を眼の上はるかに捧げて指先だけ鳥渡つまむを最も氣の利きたる握手の方法と致し候。但しこれまた今日に始まりしことと申すには無之候。

目下市中の人氣ものは印度兵にして新意匠の玩具裝飾觀せもの廣告等に最も多く用ひらるゝ圖は此れと王冠とに有之候。後者は勿論戴冠式に連なりてのことに候。今一つ戴冠式の結果はコロチーズ(Corouze)するといふ新語を生み飾りなどして騒ぐ場合に用ひられ候ひしが戴冠式もあの次第となりて流行らすしまひと相成り候。英杜戦争の最中、マフェキンの圍み解けし祝賀祭の折には倫敦の市民が狂氣の如く騒ぎ立ちしより、マフェック(Mafek)するといふ新語

出で來たり候由にて是れは爾來漸く行はれ現に去る平和祭の時な  
 ども新聞紙上に盛んに用ひられ狂喜すといふほどの意味をあらは  
 し申候恐く今後新版の大辭書には此の語を加ふること存じ候。  
 戴冠式延期といふ大打撃は英國の人々に人事無常虚榮頼み難しな  
 ざいふ一種の詩的宗教的なる感慨を興へ茲に人生の甚深を味ひた  
 りと歌ふ新聞紙あれば茲に神の莊嚴に接したりと説教する教會あ  
 り概しての調子が餘程感情的なりしやうに覺え候は其筈にこそ。  
 小生案するに當市に於ける日本の勢力範圍は岐阜提灯または酸漿  
 提灯に極はまりたり到るところに愛用せらるゝものは是れならん  
 と存じ候。また先夜は二輛の自轉車が物すきにも我が人力車の所  
 謂看板に似たる提灯を點して走るを見申候。

流行唄

年々クリスマス前後に種々の新流行歌出で、處々の劇場寄席等に  
 歌はるゝうち最とも人氣にかなひしものが翌年のクリスマスまで  
 一年間の流行唄として行はれ申し候。而して今年の此の種の唄に  
 て最も人氣あるは「忍冬花と蜜蜂」(The Honeysuckle and The Bee)と申す  
 ものに御座候。先ころ水晶宮の仕掛花火の題に之れを取りて忍冬  
 花の上を蜜蜂のわたる圖を現はし割るゝばかりの喝采を博せるも  
 ひとへに其の唄の人氣の故に候。樂譜も併せ示さでは興薄きもの  
 に候へど印刷の都合もあるべければ下に歌詩のみ掲げ申候。

On a summer afternoon,  
 When the honeysuckles bloom,  
 When all nature seem'd at rest,  
 'Neath a little rustic bow'r,  
 'Mid the perfume of the flow'r,

A maiden sat with one she loved the best.  
 As they sang the songs of love,  
 From the arbour just above,  
 Came a bee which lit upon the vine;  
 As it sipped the honey-dew,  
 They both vow'd they would be true,  
 Then he whisper'd to her words she thought divine;  
 "You are my honey, honeysuckle, I am the bee.  
 I'd like to sip the honeysweet from those red lips, you see;  
 I love you dearly, dearly, and I want you to love me,  
 You are my honey, honeysuckle, I am the bee."  
 So beneath that sky so blue,  
 These two lovers fond and true,  
 With their hearts so filled with bliss,  
 As they sat there side by side,

He asked her to be his bride,  
 She answer'd "Yes" and sealed it with a kiss;  
 For her heart had yielded soon,  
 'Neath the honeysuckle's bloom,  
 And thro' life they'd wander day by day;  
 And he vowed, just like the bee,  
 "I will build a home for thee,  
 And the bee then seem'd to answer them and say;  
 "You are my honey, honeysuckle, I am the bee.  
 I'd like to sip the honey sweet from those red lips, you see;  
 I love you dearly, dearly, and I want you to love me,  
 You are my honey, honeysuckle, I am the bee."

戀の歌なれど譯せざるがよかるべく候其の故は我が俗語にあらず  
 古歌にあらざる歌調と戀愛に對する社會の觀念と露骨なる感情の  
 發表とが容易に我が國に移すを許さざる類のものに候へば也。茲



にはたゞ原詞を擧るに止めて是非の論は後日を期し申すべく候。

(明治三十五年稿)

### 取りあつめて

夏と申すに、おのづから心ゆるみて纏まれるもの書くが懶く候。約東のダンテ論、今一回延し申すべし。去る七月半ば、俳優協會維持費募集の爲右ダンテの座にて、コマーチャント、オブ、ゼニス』を一回限りの盡興行に出だし、アーギングのシャイロック。エレン、テリーのポーシア。是れは申すまでもなき天下の一品にて、其の他倫敦中の座頭株あらかたを一堂に集め、英國劇壇の偉觀をつくし申候。評は申すも管なれど、其の人氣の殷なること、殆んど想像の外に候。殊にアーギング。エレン、テリーの初めての出及

び二人が顔を合す法廷の場の如きは、觀呼喝采の聲大地のごよみを作るが如く、四五分間は俳優も手を止めて見物の方を眺め居り候。最後に幕が下り候てよりも、凡そ七八回は幕外に俳優を呼び出だし、尙ほ際限もなく見えしかば、遂に劇場の方にて電燈を消しにかゝり、其れにて漸く見物が退散致候。勿論これは例によつてアーギングの收場演説を求むる見物の心なりしこと明かに候へど、幹事が代つて挨拶をなし其のまゝに仕まひ申候。日本にても川上が慈善演劇に同じ物をやり候とか、因縁に候べし。コマーチャント、オブ、ゼニス』は前にはオクスフォード大學演劇會が彼の地にて演じたるものを一見致候。此は申すまでも無く學生芝居なれど、併しながら、何れも行く／＼は俳優たらんとする程の熱心家なり。且つ年々夏期一回づゝの本興行に場敷を踏み來たりたる功の

者多く、なまなかの田舎芝居や、倫敦の場末芝居よりは遙かに立派に候。勿論此の興行は、劇場を借り、見物料も取り、すべて本式にやるもの候。シャイロックを勤めしは、クライスト、チャーチ、カレッヂの三年生なりしが、卒業後は直ちに斯道に入る筈と聞き及び候。俳優學校としては、従来沙翁劇を以て有名なるベンソン一座が、其の田舎廻りの組に見習生を入れて、教育し來たり、已に幾多の立派なる俳優をも出だし候が、來年よりは、ツッリも亦た同じ組織を立つる由に候。是れは今春同人が沙翁の生地ストラップオード、オン、エヴンにて、紀念祭の席上演説に、始めて發表したる計畫に候。先頃米國より歸りし女優ミセス、カムベル、藝風地位より申すも、略ぼ源之助など申す所に候はんが、ゾーデルマンの「エス、レーベ、ダス、レーベン」英譯「ジョイ、オブ、リギング」及び數年前此の女優が依りて以て名を

成せし「セカンド、ミセス、タンカレー」當時脚本家の筆頭ピチロの作の二つを引きつゞき演じて好評。二つながら似たる節ありて、所謂「イマンス、バスト」の悲劇、又此の地にて一時はやりし例のプロブレム、ブレイの部に屬すべきものに候が、我等には、日本の小説界の趣味などと思ひ比べて、至極興深く候ひき。ストラップオード、オン、エヴンと申せば、其處の名物は彼の女小説家の豪の者、メリ、コレリーに候が、カーチギー寄附の公衆圖書館を沙翁の生まれし家の裏手に建つるといふ議に反對して、盛んに氣焔を擧げ居り候。犬と猿ほど仲の悪き、ホール、ケインが、其のうち何とか口を入るれば面白からんなど申居るもの有之候。一時評壇の噂は、彼のカーライルの家庭一件及び彼れが某レデーに對する干係についての、フラッド黨と反對黨との争ひなりしが、目下

やゝ下火のやうに候。併し今後いかに發展し行くやは分らず。或は此の争ひを以て苦々しきこととし折角美しき文學史上の飾りとして保存し來たりし人物に汚點を加ふるものとする評家も候へど、我等思ふに、苦々しく口惜しき出來事たるは勿論たりされど、故に今日事を起こせるもの非なりとは申すべからず。斯くの如く成り行くの事實もし存するに於ては、縦ひ今日之れを蔽ふものあるも明日焉んぞ其の再び顯はるゝ無きを保せんや。是れ實に理數の然らしむる所に候へばなり。時と申す最上審判の前には、一切のもの皆赤裸々なるべし。毫末の陰翳といへども、之れを剝ぐに百年を賭し、千年を賭して客まざるは、大法の威嚴に候べし。斯くの如く信ずる所に、我等が日常安立の半面は立脚するに候はずや。糊塗して以て一時の喜びを竊まんとするは、愚なるかなと存候。

ローヤル、オペラ座に於ける大陸オペラの季節は先日了り申候。今年の勝觀は「リング」の連演に候ひしが、今月末よりは更らにムーデラー、マンナーの英國オペラの季節相はじまり申候。

外に音楽界にて昨年來の二大人氣は、リヒャード、ストラウスと、メーラー、ホールとに候ふべし。前者は獨の作樂家にして、彼のニーチェが「ザラツ」ストララをも樂にせる人、一派の評家よりは、ワグネル以來の大才と稱せられ、是れが一時倫敦の音楽界樂評界を騒がせしことは、昨年に於ける特殊の現象に候。即ち昨年は英國が始めて眞にストラウスを認識せし年と申すべし。またメーラー、ホールは當年十八歳の妙齡なれど、近年罕に見るヴィオリンの名手にて、是れまた昨年より今年にかけて、はじめて倫敦に其の天才を認識せられ、一時倫敦の人氣を沸騰せしめしこと、ルービンスタイン以來絶えて無き所と稱せ

られ候。是は一は此の女性音楽家の經歷の極めてロマンチックなるにも因り申すべく、十三四歳の頃は一張のヴァイオリンに市街を流しあるきて修業とも命の綱ともせりと申候。此等の事が廣く世に知るよと共に人氣は益々高まりて同じ經歷を慕ひヴァイオリン一つに家を迷ひ出でたる少女なども有之候。

畫界にては今年のローヤルアカデミーも去月限り閉場いたし候が、依然サーゼントは世界一の肖像家に候。今年の出来は善くなしとの評なれど善悪ともに評判は此の人を中心と致すべし。また畫界の奇傑、ラファエル前派の一角而かもラスキンと一代の大喧嘩をなして名を轟きたるホイッスラーは先日物故いたし候。當國にて最も多く日本畫の影響を受けたるもの此の人其の隨一に候べし。

尙ほダンテを濟ませ候次には當國畫界の現狀を論じて貴意を得べ

く候。平尾不孤君の懷抱に對する愚見は登張竹風君に復するの書と共に其の後あたりに物したく存じ居り候。

(明治三十六年八月七日稿)

文壇雜報

クリスマス

當英國文壇の雜事どもを拾ひあつめて申上ぐべく候。來る二十五日はクリスマスの事として市中一般の景氣は申す迄もなく文壇までが賑やかなりたり候。もつとも著書の方面にては新刊の大嵩なるものは却りて當月に入りてより減じたりとの事に候へど、クリスマス物の贈り物を當て込みたるチケットの翻刻や少年物など盛んに書肆雜誌店の舖頭を賑はし居り候。また雜誌もクリス

マス、ナムパーと稱して多くは附録を刷り候事我が新年附録夏期附録などいふものに異ならず。内容も多くは文壇名家の名を并べ候。

雑誌の事

當國にてひろく雑誌と申せばやはり「エヂンバラ、レゾー」を第一に數へ候ふべし。是等は新聞紙の「タイムス」哲學者の「スペンサー」、銀行の「バンク、オブ、イングランド」、哲學雑誌の「マンイド」、俳優の「アーギング」、詩人の「スキンパーン」、小説家の「メレヂス」、政治家の「チェーレン、パレン」、滑稽雑誌の「ポンチ」と申す具合に、おのづから株と相成り居り候。但しこゝに株と申すは必ずしも相傳の謂ひに非ず、また此等のうち目下なほ盛んに活動しつゝあるものも候へば、已に老朽(?)の域に入るものもあるべきこと勿論に候。たゞ其の社會々々の筆頭と申す義に候。斯くの如き「エヂンバラ、レゾー」は先達つて其の第百年號を出だ

し、過去百年間に於ける諸方面の變遷を簡叙したるものを載せ候。就中軍事實業の方面にて新進の獨逸が着々新科學思想を應用して規律的に進み行くに對し、英國の將來を警戒したる文など、嶄新の見ごいふにあらねど、時務に當たれるものとして稱讚を得たるやうに候。次いで一時「エヂンバラ、レゾー」の敵と見られし「クオタリー、レゾー」。また例のマガと稱して一時は毛蟲の如く思はれしも、終に成功して今は一個の大雑誌たる「ブラックツツドス、マガヂーン」其の他「マクミランズ、マガヂーン」、「コンテンポラリー、レゾー」、「ポールモール、ガゼット」以下數へ盡されぬ程に候へど、大なるものは、大抵社會の諸方面にわたりて、それも日本の如く片々たる雜感集には無之、研究あり主張ある評論に候。併し此の國にても雑誌の論文が政界を動かすといふが如きことは、今は稀れなりとのことに候。

昔「エチンバラ、レゾー」全盛の頃は、内閣も是れが鼻息を伺ひしこと、人の知る所に候。文壇に取りても、スコット、フーズワース。パイロンの。シエレー。キーツ。悉く當時の文星は一度「エチンバラ、レゾー」や「クオタリー、レゾー」の手にかよりて、後に其の光りを放ちしものなること、是れまた人の熟知する所に候。先頃「エチンバラ、レゾー」の開祖シエフレーが評傳の出でしとき、文界の一部に彼れを眞の批評家たりしマシエー、アーノードなど同列に論ずるは當を得たるものに非ずとの批難あり。是は畢竟彼れが文學に門外の人たりしのみならず、文學を單に戯作文字のみと輕視するの傾きありしと、其の批評のため、當時の文星が悉く傷けられて反抗せりと云ふ一種の文壇的反感にも因り候はんか。事實シエフレーを始め、當時の所謂エチンバラ、メン等が態度氣風は、我等文壇の人には餘り慕はしからぬ

やうに候。

専門雜誌にては、文學雜誌はやはり「アセニウム」と「アカデミー」に限り候ふべし。此等は週刊にて、雜誌と申すよりも新聞に近く、其の記事また長き論文よりも新書の批評、文壇の時報等を主とせるものに候へど、文壇の機關として重きをなせるは是れ等に候。「アカデミー」は稍々わか／＼しく、我が多くの文學雜誌と似たる節あれど、「アセニウム」は老實にして、重に専門家向と稱せられ居り候。美術雜誌にては「ステュデオ」「マガザイン、オブ、アート」など、其他數々あるべく、哲學雜誌にては「マインド」の外、「フキロンフキカル、レゾー」「サイコロジカル、レゾー」「インターナショナル、ジャーナル、オブ、エシツクス」また今年秋第一號を出だせし「ヒツパート、ジャーナル」は重もに宗教の方面より哲學に入るものとして、至つて評判よく候。其の他婦人雜誌、少年

雑誌等の事は今は省き申すべく其の月々の大なる出来事のみを繪入りにて纏めたるは「スフシアア」。「グラフキック」など廣く家庭に讀まれ候。例へばカイザー來たれば其の肖像やヤツチの寫眞、ピゴツト基督と宣言すれば其の肖像や教會といふさまにて此の種の雑誌も數多く田舎などへ送るには至つて重寶のこと候。また一錢雑誌と申して短き小説や歌、珍聞の類、勿論ブルガー、テーストをあてにしたるもの(を)載せたるもの幾種もあり。シチーの銀行會社などへ通ふ男女の若者や一般の労働者等がポケットの中に多く忍び居るものに候。販途の大なるものなりと云。新聞にては「タイムス」を首として「デーリー・ニウス」「デーリー・テレグラフ」以下朝刊のものは申すに及ばず、夕刊にては「グローブ」を最といたし候。政治は知らず、文藝の方面にては、依然「タイムス」の評論は重きをなし居り候。「デ

ーリー・テレグラフ」の實業的なるに對して「デーリー・ニウス」は文學的と申すべく、此の邊また文壇の勢力に候。固より勢力と申して、人に由ることに候へば、他新聞にも皆それ／＼に略ぼ定まりたる専門知名の寄書家を有し候。新聞紙の事は茲に悉くすべくも候はねど、概して如何なる方面の社會も平等の地位を保ちて紙面にあらはれ候こと、我が國と趣きを異にするは、社會其のもの、然らしむる所か新聞紙の然らしむる所かなど疑ひ居り候。

新刊書

今年中の新刊書については、既に亞米利加あたりの雑誌に何か輕便なる統計様のもの出で居るべしと存じ候。「アカデミー」が先きに諸名家に對して最も目ぼしき今年の新著二種を指摘せんことを乞ひし結果も、誌上に出で居り候が、人々の好尚によりて區々のやうに候。

茲には小生が記憶の中より重なるものを挙げ候はんに、小説類には新作の数は相變らず非常の高にて、六シリングス物、三シリングス半物、さては六ペンス物に至るまで、迎も日本などの比べらるべきものには無之候へど、併し是れは強ち皆賣るゝがためと申すには無之賣れざるものは五百部の初版も覺束なきこと、日本と大差なきやうに候へど、書肆がそれをも厭はず出版するは、中には著者みづからが費用一切を負擔する類のもの多きが故と聞き及び候。日本にも罕には此の類の事ありと記憶致し候が、此は單に無名の作家が其の才を世に問はんとして社會に拂ふ試験料と申すのみに非ず、此の國の富豪貴族などの子弟の道樂方面が、日本のよりも多く文藝に向かへるためとも申すべく、此の意味よりいへば、善き事と存じ候。斯く新刊の数は多く候へど、大作としては泰西文壇の水平を抜ける

ものといふが如きは、一も無かりしやうに候。水平にすら達せしもの幾ばくも有之まじく、寧ろ亞米利加に屬するヘンリー・ゼームスが“The Wings of the Dove”を説ものあれど、たゞ他の無味なるに比してといふまでなるべく、パーリーが“The Admirable Chitchon”は舞臺にて成功せるものなれば、讀み物として其の舊作“スラムスの窓”にだも比すべきものには非ざるべし。亞米利加のブレット・ハートが“Condensed Novels”もまた昔の面影なしと評せられ、キプリングが自畫入りの“Just so Stories”はたゞお伽話たるに止まり、且つ其の空想の範圍や、單調の嫌ひあり。ゼロームやコンラッドやはたまた同じと申すべく、數へ來たれば是れと申すもの殆んど無之候。終りに亞米利加黑人種中の詩人と稱せられ、先年詩集“Lyrics of Lowly Life”を出して、此の詩集不景氣の世の中に、優に五千部を賣りたりと謂はるゝダンバ



一が小説 "The Jest of Fate" も今年の新刊中に入るべきものに候。白人が黒人に對する待遇の偏頗を動機としたる筋なれど、人種的義憤を漏らすものとしては、事柄の平凡卑賤に過ぎて、同感するものも唯憐むべしと思ふに過ぎず。威嚴足らずと申すべきか。但し叙事の筆力だけは世の評家に認められしやうに候。

詩壇また新著徒らに多くして大なるもの無し。現詩宗の詩集彼れが如く、其の南亞平和の詩も、人の顧みるもの無し。スキンパーンがヂューマを憶ふの詩は「ナインティーンス、センチュリー」の巻頭に出で候へど、極めて短きものに候。恰もアルフレッド、オースチンの南亞平和の詩と前後して出で候ため、彼れ此れを比して言ふものは、矢張り短きながらもスキンパーンの方は詩なりなど申し居り候へど、所詮以て詩壇の落糞を破るには足らず候。キプリング歌はず、ワトソン

僅かに其の詩集を再刊すと申せば、それにて詩壇の事は盡き申すべし。序でに詩人の世評を申さば、此の國の人が知るも知らぬも先づ指を屈するはシェイクスピアとミルトンは是れにワーズワースを配して、此の三人は第一流の詩人たるに疑ひ無きこと、天に日月の懸るが如しと考へ居るものゝ如くに候。但しシェイクスピアは姑く措き、ミルトンを讀みたるものが所謂一般世俗の側に幾くばくなるかは存せず候。ワーズワースは語は俗なれども想の高き所に至りては、我等もなほ解し得ざることありとは、専門家も往々口にする所に候。バイロン。シエレーは一まはり小さく、ロゼチ。モリスは更に一まはり小さしと認められ、テニスン。ブラウニングは今人氣の盛りなれど、申さば之れを第一の組に配するか、第二の組に配するか、研究といふ態度に候。ブラウニングに關しては、先頃ブルックの評論

出でてなかくの**大冊**なれど**評判**あまり善からず我等が讀みても、**無理**に**評論**したるが如き嫌ひあり、**理窟**すぎ若しくはくど過ぎたる節多し。併し**兎**に**角聲**ある**批評家**の手により堂々たる**書冊**として出でたるものなれば、**ブラウニング**の研究を鼓吹するには此の上なき書と申すべく、**著者**みづからも**ブラウニング**の想は極めて難解のものなれば、我れはたゞ世の注意を是れに呼べば足ると申し居りて由に候。其の**他蘇格蘭人**の**バーンス**を説くは其の筈なるべく、**詩人**らしき**詩人**は**シエレー**なりと、**人々**之れを喜ぶさまに候。殊に**オクスフォード**の人は其の**昔例**の**無神論**に驚かされて彼れを追放せしにも拘らず、今はなかくの**シエレー**最負にて、**ユニヴァーシティー**、**カレッジ**には彼れが**裸體**のまゝに横はり居る**大理石像**有之候。彼れとても**溺死**するとき**裸體**にては非ざりしならんをなご**冷評**する人

も有之候へど、そこは**美術**の**機能**とも申すべく、**兎**に**角**うつくしく候。但し**シエレー**を説くものといへども、**流石**に其の作に對し若しくは其の**生涯**に對する**同感**を取りて、直ちに**現在**生活の**規範**を論じ去らんとするものは**無之**候。道徳は詩を厭し、詩は道徳を厭するを事として、**眞**に其の間に挟まれる**人生**の難事を研究し解決せんとするもの無き我が**思想界**に思ひ比べては、**ジョンソンの重さ**、**萬鈞**と申すべし。さて**現代**にありては、**前便**にも申せし如く、**スキンパー**を唯一の飾りとし、**若手**にては**兎**も**角**も**キプリング**の**聲望**なほ遙かに**他**を厭し居り候。つゞいては**ワトソン**に**指**を屈するもの多し。ノホリ**ツプス**を説きミセス、**マーガレット**、**ツッツ**の**詩才**の方面を説くときは、**候補者**は尙ほ**際限**もなく出で來たるべく、**結局**此等はみな**未定案**にして**將來**によりて其の**眞地位**定まるものと存じ候。斯く述べ來た

らば、以て如何に英國詩壇の現状の心細きものなるかは察せらるべく候。流行歌子守歌等についても尙申すべき事有之候へど、他日を期し候。

評論の方面にては、夫のマクミラン會社の「英國文人傳」叢書の大抵評判よき「テニズン論不評」外前に申せしブルークの「プラウニング論」など、大なる評論物と申すべく、ラスキンに關するもの、ダンテに關するものなども一二有之、専ら理論に涉れるものにては、セーレンツペリーの批評史の第二卷前人の未だ到らざりし領域に接し候ため、強く人の注目を惹き、一派の人は其の難解にして奇語多き文章にも其の快樂的審美説の主義にも其の傲岸にして冷に過ぐる態度にも批難を入るれど、嚴然たる大著なることは否むべからずと存じ候。丁度十八世紀まで進み居り候。此の著者は今エヂンバラに文學修辭の教

授を致し居り候へば、其内尋ねて見たこと存じ候。倫理の方面にては故シツウキツクが遺著「The Ethics of Green, Spencer and Martineau」を最とすべし。三家の倫理觀に對する批評と自家の「Methods of Ethics」に見はれたる主義の辯護とを含める講義集にして、以て最近に於ける英國倫理界の四傑を一堂に見るを得べし。倫理的快樂説と心理的快樂説との關係は如何。快樂的倫理觀と社會的乃至博愛的倫理觀との結局の調和は如何。此の書一冊を繕くも、優にかの人心の倫理的事實を没却して、背理論を超理論と心得る偽悪者流をささすに足るべし。吾人も寧ろ根本に於いては快樂觀個人觀を取るべし。されども今日歐洲思潮の深き都面に流るる快樂觀個人觀は豈彼れが如く單純幼稚のものならんや。吾人いま暇を得ず。此の書を梁川君の座右に進めて、病ひ平かなるの時、其の評を公けにし給はんこ

ことを望むものに候。尙ジエームス、マーチノーに關しては、其の詳傳も二卷の大冊となりて今夏出で、是れまた好評なれど、我等には趣味薄く候。次にはウキリアム、ゼームスの『The Varieties of Religious Experience』は其の書名の示す如く人心の宗教的事實の研究にて、蓋し今年出版物中最も價值あるものゝ一に候ふべく、其の後に出版せるマロツクの『Religion as a Creditable Doctrine』また其の教義結論よりも其の前驅として著者が現時のあらゆる教義を破したる所に痛快の知識ありとの稱讃を得たるもの、是れに亞米利加、ハーワードの神學教授、故エヴレットが『The Psychological Elements of Religious Faith』(此の書は極めて初歩なるものを合せて、最近英國に於ける宗教心の心理的研究を観るは最も趣味あることゝ存じ候まゝ、是れは細論を後に期し申候。勿論是れは眞研究の方面のみを取れるにて、此等とむ

しろ反對の側に立ち、初めより宗教を研究の外に置き、哲學の外に置き、科學の外に置かんとして、己れ却りて一種の研究者となり、哲學者となれる類の書は多く有之候へども、取るに足らずとして、度外に置き候。此等の書多くは彼の説教者の口吻を學びて、宗教は超自然の感情に基づくが故に知識の外なりといふ一案を、語を換へ人を換へて反覆するに過ぎず。超自然を説いては背自然と混雜するも、此の種の書に候。一世の科學的知識が不可有と斷する所に迷信の境あり、一世の科學的知識が不可知と斷する所に宗教の境あるを思はず、哲學を斥くるの筆鋒を以てまた科學的知識を斥けんとするは此の種の書に候。其の他、ボールドキンが『Dictionary of Philosophy and Psychology』も續々出で、手數のかゝりし有益の書の一に候。

また亞米利加のリッデルが『An Introduction to the Study of Poetry』は

英詩の句法を分解的に研究したるものにて、我れ等には少なからず興味を覚え候。キツドの "Principles of Western Civilization" は是れまた今年中の大著の一にて世評も固より申分なく、史家思想家の必ず讀むべき書と申候。後より細評いたすべく候。

譯翻物にては、トルストイ。ゴルギイ。モーパッサンなど見受け候。但し是等固より日本の如く。我が家を空にして之れに走るわけにはさら／＼無之、日本にゴルキイ入りニイチエ入るといふとは、全然意義を異に致し候。過般の一新聞に、イブセンの我が邦に譯せられしことを記して、此の諾威詩人の心理研究が果たしてよく日本に適するか、はた日本人も "The things to read" といふが如き讀物の流行を有するか、そも／＼彼等が盛んに泰西の文明を味はんとするの結果なるか、といふやうの事を書き居り候。日本人は寧ろ如何なる心理

にも餘りに早く適し過ぐるを申すべし。

嘗て在獨の學友筑水君は、日本人の弊所を顧みて、巾着切の如しこの事なりしが、是はむしろ其の卑くして小ざかしき智識の上よりのことなるべく情の上より申さば、六七歳の少女の如し。それすら動もすれば四十度以上の熱を持ちて、神經の高じたる形と申すべし。泣くも笑ふも法外也。他年若し佛蘭西が所謂文明進轉の犠牲となりて、第二の革命に狂ふことあらば、されども事實は然らざるべし。

歴史は繰り返すものに非ず、佛蘭西は日本よりも賢なり。經驗の意義を知れり、其の後へに妄奔してダントン。ロベスピールが餌食となるものは日本人なるかも未だ知るべからず。吾人の學ぶべき經驗は寧ろ英獨にあらずや。

話題本に歸りて、雜著とも見るべき新刊の中にては、彼の杜國のクル

ーゲルが“Memoir”とデウエットが“Three Years War”と最も歓迎せられ、クリスマスの贈物用として多くの書店が店頭で推薦し居るものに候。其の他“Encyclopaedia Britannica”第十版増補の部も續々出で、“Oxford English Dictionary”も既にQの部まで進み候。是れ等は何れも世に定評あるものとして評する迄もなく候。

(明治三十七年二月十九日)



思想問題

されば此の國の風氣に染むにつれ最も先づ我等の心に歴し來たるものは、宗教問題に候ふべし。御承知の如く目下政治部面に於いて黨のあひだ人のあひだに火花を散らして戦はるゝ教育案の争ひの如き、やがて直ちに此の國の宗教問題、道德問題、人心問題の現状を曝露したるものには候はずや。否な延いて歐洲の全局にわたれる思想界亂調のキーノードとも見るべきものに候はずや、思ふに宗教の前途はまことに測りがたう安んじがたきものゝ一つに候ふべし。

吾人が目下の見を以てすれば、少なくとも歐洲の基督教は眼前に非常の危機を控へ居るものに候。此の點我等の日本にありて、日本の宗教的狀態に鑑みて推測せるところ、此の地に來たりて密に事實に觸れて考ふるところ、大差無し。當英國を標準として申すときは、歐洲の社會といへども、宗教が人心に對する眞實の勢力は決して誇るに足るべきものならず。少なくとも吾人が宗教といふ一語によりて思念する、一種超越にして熱力あり莊嚴あり依頼あり鼓吹あるが如き眞個の宗教的信仰が社會の人心を支配し道徳を維持すとは夢にも思はれず候。大陸の諸國に比するときは、英國は最も宗教的、道徳的なりと申す、而も其の英國に於ける内面の宗教的勢力が既に甚だ頼むべからざるものたるは、少しく洞察の力あるものゝ等しく否む能はざる事實と存じ候、此の事實に異存を挾むものあらば、其

は必ずや天性負け惜みの強き當國人みづからが彌縫の言か、然らずんば此の種の言に聽いて而して事の裏面を觀るの明なき徒が、膚淺の立説と存じ候。

然れども之れを大陸の諸國に比するときは、茲に英國の没すべからざる特色を保有し居ること勿論に候。現時大陸に於ける基督教の眞地位は、殆んど零と申すも大過無きものゝやうに候へば、舊宗教はかこに於いて先づ内より崩れたりとも申さんか。固より教會あり勤行あり、誓文に基督の名を呼び、國に基督教國の名を冠するが如きは、滔々たる習風、今なほ古の如くなるを得んも、此等の事實、宗教の眞生命に何程の價値をか添へ候はんや。覺醒ある人心の奥に於いて、舊宗教はすでに其の積極的勢力を失へりと申すべし。

吾人はこゝに積極的勢力といふ、其の意、宗教の鼓吹的方面なり、宗教

的信仰が積極的に道徳を指導するの謂ひなり。宗教と道徳との關係といふが如き論は、現下なほ日本の論壇にも榮へ居るやうに候へど、歸するところ、從來世人の漠として唱へ來たれる宗教的信仰といふもの若しくは其が威力には積極消極の二面あり。積極に於いては、彼等は宗教的信仰といふ美しき名によりて、人生不斷の指導者を得、鼓吹者を得、保助者を得んと致す、絶えず人心の一隅に神の名と抱和したる一道の熱火あり、人生の行路すなはち道徳の神秘的直射的なる燈明となり、氣力となる、想像致すものに候。また宗教的信仰の消極とは、彼等必ずしも不斷といはず、鼓吹といはず、指導といはず、たゞ暫時隨所に休息を得、安慰を得、没入を得んとするものに候。彼等は決して日常不斷の道徳的行爲に一々神の信念を呼び出だすを須ひず、或は在來習俗の道徳により、或は自家特殊の理見により、たゞ

正直に殆んど自ら是非を疑ふといふが如き境に想ひ到ることすら無くして、此の世を過し行くものに候へど、一朝身世の不如意、人事の蹉跎に遭遇し、煩悶し、嗟嘆し、困憊して爲す所を知らざるに至るや、これに仰いで訴ふる所を得んとす。退いて息ふ所を得んとす。これやがて消極なる宗教的信仰の作用するところに候ふべし。神といふ、大樹の蔭に、しばしが程の安息を得んとす。安息し了れば復たび新たなる旅程に上る。而も吾人は安息によりて唯一時の慰藉を得たるのみ、回復を得たるのみ、新たなる旅程の岐路を之れによりて指導すべき別種の力を得んとは必ずべからず。要するに宗教的信仰の積極は發動的にして消極は受動的なり、一は鼓吹にして、一は安息なり、一は行住坐臥なるべく、一は隨縁時發なるべし。積極消極の意これのみ。嚴にいふ宗教的信仰の威力はこの外にあるべからずと



存じ候。

而して大陸の宗教が事實に於いて其の生命の大半たる積極的の威力を失ひ了せりと致さば換言すれば眞實神の爲に戦に赴くの勇卒來世の念敬神の心に信念の基礎を置きて信する所に忠なるの國士神の榮光に接すと意識して此の世を樂しく送るの良民此等のもの漸く世の進歩といひ知識といひ自覺といふ社會より跡を絶たんとすと致さば剩すところは知るべきのみ。基督教は唯僅かに消極的の生命を敗殘の餘に保つものと申すべし。寂寞たる教會の薄暮冷かなる腰掛の片隅に一人黙然として祈禱の頭を得も上げざるものは蓋し半生の罪惡身を責めて神の大悲に安息せんとするものなるべし。弊衣蒼面の人が仰いて薄運を嘆じ俯して神の恩藉に依らんとするもまた此の處なり。日曜の教會に集まる老幼も教會の重き空氣に

包まれ撫するが如き讚美の樂に心耳を澄ます間は暫く浮世の愛惡を忘れて玲瓏の境に没入するを得。此等は宗教の消極的効果に候をはずや。されど一步教會を出で一旦境遇を異にする時は宗教的態度は忽消了す。教會は畢竟我に清き安慰を與へ思念反省の機與へて以て遷善改化の緒を作らしむるの道具たり。神の名に於て之れを莊嚴し音樂唱歌色彩建築等の美術的威力を以て之れを有力にしたる一の道徳的器具たり。其の以上今の教會今の宗教が人に何程の不朽の精神を鼓吹し得べしとも覺えず候。固より少數の無邪無識なる人々に残れる舊信仰の威力は論外と御覽あるべく候。斯くして歐洲の基督教は空なる名と空なる會堂と空なる儀式と空なる心なる牧師空なる信徒との外たゞ消極的信仰に其の餘命を保つものと存せられ候。

されど其の消極的餘命と申すものすら大陸は既に之れを亡じたるに近し。彼等基督教徒に取りては一週の聖日たる日曜のさまに御覽せよ前より此の地の人々が論ずる日曜の性質論の如き最もよくこの間の消息を漏らすものに候はずや。大陸の日曜のたゞバンクホリデーたるに止まるは果たして可なりや。日曜は決して娛樂の日にあらず少なくとも其の娛樂は宗教的安息宗教的反省に伴ふの娛樂ならざるべからずとは英國的日曜の性質に候。大陸はすなはち英國國民がせめて一週に一度たりとも靜に神を思はんといふ消極的態度をすら既に脱し去りて所謂紳士淑女といふものゝ中日曜の教會にすら行くを必せざるもの多きに非ずや。教會に行かざるもの必すしも神を拒否し宗教を拒否するものに非ざるは言ふまでもなく候へど之れと同時にまた神無しといふ社會に立つも彼等は何

の痛痒をも感ぜざるべく候彼等が行住坐臥の念頭に宗教の威力なきは、竟畢宗教的信仰の頽然として内より崩れたれば也。此の點に於いて英國はなほ大に持する所あり。併しながら英國といへども決して宗教安泰の國にあらざるは始めに申せし通りに候。唯保守力に富める國民だけに宗教破壊の潮流に後れ居るまでに候。されば大陸が既に經過したりし宗教道徳の行程をも猶ほ將來若しくは現前に具有して舊信仰舊宗教の大海に汹涌する、あらゆる波瀾を一國の思潮の中に收めたるはやがて此の國の最も我等が觀察に趣味ある所以に候。老幼と語れば老幼見を異にし、僧俗と語れば僧俗説を異にし、公園に宗論を闘はすもの、食卓に基督を議するもの、凡て基督教破壊の大潮に一水を注ぎ一波を添ふるものに非ざるは無しと申すべく候。我等は如何に宗教的信仰

の生命あるかを見んとするよりも寧ろ如何に宗教的信仰の破壊せられ行くかを見んがために此の國に來たるべし。更に精しく申さば如何に英國國民が基督教の破壊を防がんとして苦悶しつゝも大潮のために押し流され行くかを見るべく候。

教育案は畢竟國家が基督教の力を初等教育の中に保持せしめんとするものに非ずや。チエームバレンの演説政治上の意義勿論理由は單一ならざるべしといへども之れを思想の上に及ぼす効果より申せば國教の威信やうやく崩れんとして政府之れを少年子弟の教育の上に防がんとするものと申すに不可なし。然れども斯くの如くして果たして幾ばくかよく個人が思想の自然の發展を防遏し得べしと思はざるゝぞ。

はたまた一面にオーストリアの強き根柢を有する當國は他面に

最も反對なるユニテリアニズムの存立をも容認するに候はずや。

英國教會派の中にすら十字架の羅拜を拒むの潮流は漲りつゝあるに候はずや。凡そ舊約書を信じ、奇蹟を信じ、儀式を重んじ、十字架を拜し、基督を神とするものよりして舊約書を斥け、奇蹟を斥け、十字架を斥け、基督を人とし、神を理體とすら見んとするに至るまで尙くも基督教が宗教の名の下に存立し得ん限りの宗派宗論はこゝに集まりて舊信仰破壊の潮流に瀾をなし淵をなす。此等の事象大陸には古くして當國に新しきものと申すべし。はた恐らくは尙ほ幾歳月の間當國にありては此等の事象を常に新しきと見ざるを得ざるべし。これやがて此の國の宗教が長く觀察者に趣味ある所以に候。

基督教の斯くの如く崩れんとするは固より一旦夕の事に非ざるの理歐洲の哲學史、宗教史を一見せる者の夙に知る所に候はん。縁は

多かるべしといへども、主因は知識の進歩に伴ふ理と信との乖背にあること動かすべからず、十九世紀は十九世紀の知識が是認するの内容を、其の宗教的信仰の中に求めて、此れに合せざるものを毀てるにて候。彼等は先づ宗教的信仰が要とする一種の莊嚴崇拜の情に向かつて、其の客體の人格神といひ不思議力といふが如きものに輕侮の感を挟み、こゝに内心の莊嚴を破り、崇拜を破り、宗教の威力をして道徳の上より引き退かしめたるに候はずや。之れ實際に於ける舊宗教の敗亡なり。而して更に其の理の鋭きものは、其の殘骸に向かつて解剖の刀を加へ、遂に之れを形實ともに解體し盡さずんば已まざらんとす。舊宗教は實に理の下に崩れたるにて候。さらば英國國民は宗教の實勢力より獨立して如何にせんとするか。曰はく彼等の尤なるものは其の教育により歴史により天性により

國家によりて造り上げられたる一種の強き性格を有す之れによりて彼等の道徳は常に鹽梅せられ行くが故に、彼等を以て大陸の國民に比するときは、道徳に於いて正しく一步を抜くの觀を成す。宗教的威力國民の内心より衰へ去るも、彼等は毅然として動かざるの道徳的性格を有す。道徳的性格はやがて道徳的信仰と同義たり。將來の此の國の道徳は知らず、現下において、英國國民は宗教的といふよりも遙に道徳的といふを當たれりと致すべし。夫の單に國教や儀式や宣誓や世に行はるるものゝ外形によりて、直ちに英國を宗教的國家と嘆美するが如き徒、世上には間ありと申す。何等の短見ぞや。斯くの如きの徒はまた西洋の結婚の神の名によりて行はるゝを見て、宗教的結婚と驚駭し賛嘆するの徒なるべく候。笑べし。思ふに英國國民が概しての道徳的傾向と及び、彼等が宗教の形式に突

飛の破壊を企てざる保守性とは相合して皮相者流に宗教堅固の國といふの念を抱かしむるの原因たるべく候。英國民が宗教的信仰以外基督教を一種の國家的觀念歴史的觀念より愛重し保持せんとするの傾きは宗教的國家にあらずして國家的宗教といふの觀を呈し候。彼等が宗派心の強きもまた同じく彼等の固着性を主因とするのみ、宗教的信仰は此の間に幾ばくの生命をも有せず候。翻つて大陸の様を察するに、こゝには宗教の敗類と或は前し或は後して舊道徳また肆然として亡びんとするものゝ如く候。此は必ずしも宗教敗類の場合と同一にあらざること論なし。原因は極めて複雑なるべしといへども現當の事實に於いて自家を中心とせる感情の勃興が其の最強破壊力たるは認め易き事實と存じ候。即ち現在の事實に於いて此の種の感情のために夫妻の關係亂れ親子の情

誼沒せんとするもの多きは大陸道徳の情勢と相見え候是等の事必ずしも此に實例を引くまでもなく大陸諸國の社會方面を見聞するものゝ直ちに首肯する所と存じ候語をかへて申さば個性欲の強梁なるがために舊道徳の綱絶え果てんとするもの今日の歐洲大陸に於ける裏面的社會なり。然らば彼等は舊宗教を破り舊道徳を破りてこゝに満足を得飽和を得たりや。曰はく否な。彼等は此の上に更に特殊の要求を有す。蓋し彼等が一切の此の種の行為は事實に於いて裏面的なり。竊盜的なり。白晝公然人の妻を姦し面前人に誇りて胎兒を墮するものは未だ正常の社會に絶えて無し。彼等の個性欲の跋扈が多くの場合に於いて反對の羈約を感ずるを知るなり。茲に於いては彼等の心は悶々の苦みに堪えずして何れの方面にか解決を要求し來たる。

今日の此等の國民、否凡そ斯くの如き道徳的過渡に立てるの國民は、何れを問はず此の解決の要求を彼等が最要事の一事感せざるは無かるべく候。或るものは感情の行くがまゝを恣にせんがため、ひたすら之れを是認せしむるの口實を要求す、言ひ前を要求す。これも解決の要求に候。また或るものは此の感情を和げんとして偏へに反對の力を強うするの道を講ず、是れも解決の要求に候。解決の要求とは畢竟人生に對し道徳に對する最上原理の要求なり。人心の何れの部分をも満足せしむべき信仰なり。更に申さば頼るに足る主義の要求なり。之れによりて何れにか我が苦悶の斷除を得んとするものに候。今日の大陸國民は眞箇切實に此の如き主義を要求しつゝあるものと申すべし。

此の一事直ちに今日の思想界の現状と相照應す。倫理學を立つる

もの多きも、新宗教の必要を説くものあるも、小説詩歌に主張を喜ぶの傾向あるも、すべて是れ感情理性の今更らの矛盾に悶ふるものが、何れにか解決を得、口實を得んとする所謂主義の要求に反應するものに非ざるは無く候。

なほ此の點の細説に入るに先だつて、後のために一言注意を喚び置くべきは、解決の要求といふことが、正しく斯く意識する一刹那よりして、截然として理性の過程に入れることに候。如何にして安易に斯の欲を遂ぐべきか、如何にして反對の原理と調和し若しくは之れを折伏すべきかと思念するは、直ちに是れ工風なり鹽梅なり。感情を要せず、苟くも王風の門を潜りて後ちに來たれるものは、半行の結論たりとも、理性の共同を拒否する能はず候。

そもく懐疑とは知識の不満足の謂ひなり何故にと尋究するの意なり。知識的結論を得て満足せんとするの義なり。されば知識以外懐疑を解くの途はたゞ其の懐疑の發足點たる矛盾と苦悶とを事實の上に除くの外なし。一派の論者動もすれば懐疑と感情の矛盾とを混同して懐疑そのものが結論の満足を待たずして直ちに感情の矛盾をも調攝し得るかの如く誤解するものあり。自ら理性乃至知識を嫌ふと唱へながら何故にと問ふの懐疑を以て感情體達の道とし懐疑に入れよ悟るを得ん而も其の悟りには知識與からずなどいふ。理に味き者とは此等の謂ひなり。斯かる徒が悟道ぶりて禪僧などの套口吻を真似るの言に何程の眞實と價值とあるかは疑はじきものに候はずや。此の點に關しては夫の禪家の術さらに伶俐なり。彼等は始めより何故にと問ふの懐疑を斥け全く無念にし

て證悟せよといふ。此の説の實證すら頗るむつかしきものなるべきを始めより疑ひて而して知識の階程を経ざるの證悟に入れとは木に縁りて魚の譬へも物かはと存せられ候。

さて歐洲の天地が斯くの如くして主義を要求するにあたり之れに應じて出でたるもの大小限りなしといへども此等みな既に世に公けにするの主義たり原理たり信仰たる以上は之れを以て世の檢斷を受けんと擬したるものに候。一世の何程かよく此の主義を受容し得るぞ。一世は此の受驗者に對してテスタファイする所無かるべからず。斯くして或る主義は捨てられ或る主義は取られ或る主義は變せられたりといへども而かも疑ひは尙ほ心の奥に消えざるもの多く遂に五十年の世路千卷の讀書も得る所なきを嘆ずるのフアウストを實現するに至る斯かるものは悟れるに非ずしてなほ迷

へるものなるが故に遂にひとり自ら毒を仰いで死するかひとり自  
暴自棄して悪魔の子弟となるの外なし。新宗教若し来たれば切に  
此の苦悶に會するものならざるべからず。將來の大宗教は原罪を  
濟ふの宗教にも非ず世の罪惡を勸化するの宗教にも非ずして最も  
此の人生の苦悶を救ふものならざるべからず。

世にある幾多の主義のうち始めより感情を壓して之れを罪惡視す  
るものは始く措き専ら感情を立て之れにのみ依らんとするもの  
即ち個性欲を第一義に置く主義の中には曰はく個人中心主義曰は  
く快樂中心主義曰はく戀愛中心主義而して個人中心主義は遂に其  
の個人を大なる個人若しくは多數の個人といふ意に緩和し變形し  
て世の檢斷に合せんとせり。此に於いてか主義の生命は却つて個  
性欲以外の何物にか移り行かんとす。快樂中心主義は即ち其の快

樂を廣き快樂高き満足といふが如きものに限りて是れまた主義の  
生命を固性欲の外に移し戀愛中心主義は其の戀愛を更に博愛同情  
といふが如きものに變じて是れはた固性欲以外に生命を求めんと  
す。世の思慮あるものゝ中絶對の戀愛中心主義を實行し絶對の快  
樂中心主義を實行し絶對の個人中心主義を實行したるものなく實  
行して満足したるもの絶えて無し。世の主義に對する檢斷は實に  
斯くの如き結果を生ぜるにて候。

夫の今以て我が文壇に餘炎を留むるすら奇怪至極なるニイチエ主  
義の如きも如上の主義の一つに候。  
ニイチエを主義として見るときは詮する所個性欲を極端にまで伸  
長せしむといふに要旨は盡き申すべし。而して歐洲に於ける其の  
祖述者(?)が彼れを稱讚する第一の理由は曰はく基督教の下にあり



ては前人も流石に断言するを懼りし近世思漸の暗流を。大膽に世に推薦したるにありと。即ち基督教の下に掩蔽せられたりし個性欲を世に顯示したるを其の効と致すなり。されども斯くの如きはたゞ其の勇氣を讃すといふに止まりて主義其のものゝ善悪には何の關する所もあるまじく候。主義は當さに之れより世の檢断を受くべきものなるべく候。而して吾人の見るところを以てするとき、此の主義も必ずまた先きの場合と同じく一部の緩和を得て始めて是認せらるゝものとなるべく候。

其の理由は申すまでもなく人間心底の一例を見落としたるものなればなり。本來基督教が今日の社會道德に及ぼすの力はさまで大なるものなりやといふこと根本の疑問なるは前に論せる所の如くに候。即ちニイチエが嘲る所の今の道德は必ずしも基督教の掩護

を假らすまた基督教を源とせずして發し來たるを得べく是れ實に人間の奥にひそめる性理の聲を説くものに候へば也。基督教は寧ろ斯の如き道德の領内に於いて生を保たざるを得ざるに至らんとせるもの現時の大勢には候はずや。されば實際道德の上において基督教は既にニイチエを待たずして壓倒せられたるものに候。

若し今の世の道德界に個性欲を壓して立たんとするの威力ありとせば其は基督教にあらずして實に理性なり。神に非ずして人間なり個人そのものなり。少なくとも個人の中に住して個性の半體たるの神なり。基督教の神を倒すに於いてニイチエに何程の効か候はんや。ニイチエが此の點に一步を過てるものなることは此の地の最負者の或るものゝ如きも之れを認めながら猶ほ之れを他の論點に移して軽く靡し去らんとするは何ぞ。是れ實にニイチエが効

續に關する要點の一に候はずや。即ち彼れは事實に於いてもまた  
 其の言説中に於いても理性其のものを排却するものに候。されど  
 理性の聲果たして塞ぎつくすを得べきものなりや。之れを迷ひと  
 して斥け去る所に如何の満足か得らるべき。理性も所詮は我が五  
 尺の身體の爲に存するものなること或はニイチエのいふが如くな  
 るかも知るべからず。而かも猶ほ斯くの如くして理性は眞なるを  
 妨げず候。吾人がニイチエの説の必ず緩和を要するものなるを思  
 ふの根本は到底個性欲と理性欲と兩元の共に眞實なるを否む能は  
 ざる點に候。

去りて日本の文壇如何にと御覽あれ。僅かに一部の書一篇の文を  
 讀んで之れに會心の所あれば直ちに全身を之れ吞まれて其の外を  
 回顧するの餘裕を有せず。ニイチエ乃至は美的生活とやらんの事

事しきよ。而して世上また今更らじう是れに追隨するの徒尤らし  
 き口吻もて之れに好意の解釋を附せんとするの輩彼等の前には歐  
 洲の思想界が經歷し來たる經驗は何の意義もなかるべく否な恐ら  
 く讀書嫌ひの彼等はろくく書物をも讀まずしてたゞ我が佛尊し  
 どのみ騒ぎ上ぐるものに候ふべし思ひ來たれば一面のポンチ畫場  
 試みに其の二三を描き候はんか。

先づ鼠負連に見るべし。彼等が此の種の説に道理を附する第一の  
 理由は時勢の産物也といふにあり。善し。時勢の産物とは譬へば  
 病める血にわくバチルス（Bacillus）の如きものをいふ也。また此のバチルス  
 に反して生ずる一種の毒素の如きをもいふ也。斯くの如くして造  
 化の體制は自治自療の道を有す。欲性主義は其の何れなりといふ  
 や。

いふまでもなく彼等は之れを以てパチルスに對するの毒素なりといふべし。即ち人體に對するの薬素なり。さらば此の見は何程の根據を有するや。彼等常に本國獨逸の狀態を口にす曰はく個人の機能蹂躪せらるゝの今の世には此の種の説の要ありと。即ち個人の無視はパチルス也。欲性主義は斯くの如き社會の組織を斃さんとするものなるが故に人生の良薬なりといふなり。假りに此の根據は是なりとするも、何ぞ其の根據を見るに寛にして其の結果を見るに偏なるや、蒙なるや。記せよ、造化は決してパチルスを斃すの毒素が人體をも併せて毒するが如き拙悪の例を人間に示すものに非ざるを。假りに欲性主義を以て今の社會組織、國家組織を破壊し得とするも、是れ無謀の破壊也、無思慮の破壊也、建設の豫期なく準備なくして企つるの破壊也。破壊荒廢の後、何物か残ると思ふぞ。靜に

思へ公平に思へ。留まるものは唯自家の欲性に猛り立つ個人のみならずや。是れを豺狼野に相食ひ鷲鷲空に相撃つ、の狀に思ひ比べて、何所に相違を見んとするぞ。斯くの如くして何所に欲性の満足を得んとするぞ。今日の社會國家も昔は一たび斯くの如くなりしならんか。理性の光り之れを導びいて今日あるを致す今日の社會や國家や、皆存立の根據を有す。病あらば改むべし、破壊も可ならざるに非ず、必ず改造を以て之れに繼がざるべからず。而して感情みづからは唯進むを知りて形を有せず形を造るといふは常に理性の共同作用といふこと也。結局欲性主義の結論は或は現社會の組織を斃すべしといへども併せて人生を斃すもの也。個人を斃すもの也、欲性みづから殺死せんとするもの也。此等の理殆ど言を須たざるが如くにして、而かも夫の聰明寛大なる最負の徒の参照する

所とならざるは何ぞや。欲性主義の根據に向かつて寛大ならんとするものは同時にまた之れが結果に向かつても聰明ならざるべからず、彼等もまた多忙なる哉。

然り、彼等の或る者は聰明を忘るゝものに非ず。茲に於いてか曰はく、上の如き結果を恐るゝが故に唯其の一部を取りて之れを緩和すべしと。言ふことは理性によりて之れを鹽梅せんといふなり。まことに至當の見なり。されども至當化するに共に欲性主義を最負するの根據は瓦解し了するに必づけりや。欲性主義の面目は其の理性を拒斥する所にあり、感情の往々に任す所にあり。之れに理性の案排を加ふるは欲性主義を破毀するなり。何の理由あつてか而かく自ら破毀するものに執着せんとするや。彼等更に辭を設けて曰はく、唯其の感情欲性にエンフアシスを與へ、

之れを忘れざらしめし所に價値ありと。粗心の至りなり。凡そ世の快樂主義、社會主義といふが如きものゝ中に、欲性に重きを置いて發足し、個人に重きを置いて發足せし主義の儂指に堪えたるものあるを知れりや。而して是等の主義がニイチエ等を待たずして世に存せしものなるを知れりや。はたまたニイチエ出でより其の効によりて世の幾ばくの主義か感情に更に重きを置くに至りしぞ。否、重きを置くに至りしものは是れあるべし。而も此等のもの能く幾ばくか之れによりて一層多く時代に満足を與ふるものとなりしぞ。之れを要するに世は彼れが如き無謀無慚の方法に於いて感情欲性を鼓吹するの必要を有せざるなり。世間はむしろ欲性に於いて夫の主義者よりも一步を先んじたる也。最負の徒また曰はく、我等はたゞ之れに同感するのみと、彼等が心の

底に觸るゝものあるに同感するのみと。此は畢竟彼等の心幼稚なればなり。世波に搖らるゝこと少なく書を読むこと足らず材質空にして唯みづから自家の幼稚なる多感性にのみ願省するが故に世上更に高大なる同感の味あることを知らざるなり。そもく心の底とは何ぞや。我等が長へに自家の快樂満足を思慕するの念なるべし。然れども單に之れに觸るゝのみならば何の讚美ありや。彼等は何故に同一理由によりて貧の盗みするもの人の妻を姦するものに讚美を捧げざるや。若し此の如きものを以て心の底といはば其の底は淺きものなり。其の同感は小さきものなり。我等が眞の同感に欲性其のものゝ認諾にあらすして欲性の上に理性の反對を認諾する所に生ず。即ち大同感は一元の上に立たずして二元の上に立つ二元に同一の認諾を與ふるときは矛盾を生じて此に人生の

涙あり此の涙に同感するに至りて始めて眞の同感に非ずや彼等曲げて此の深き同感を欲性論者の説中にまで羅織し出ださんとするか何の必要ありてかしかく牽強附會の勞を積みても毒中に藥を求めんとはするぞ欲性によりて理性を拂拭する其の結論に欲性主義の生命あることを忘れざれ。

遮莫此の種の追拜者流が青年に多きを見て吾人はうたゞ彼等が讀文力の卑きを思はずんばあらず。文を讀んで眞個に之れを味ふを知らず。少しく筆力の強き文に逢へば其の筆華に魅せられたりして醉へるが如く一切の思慮を忘じ去つて顧みず。文に讀まるゝものは此の徒なり彼等は文を讀んで文の奥に横たはるの文體其のものに翫味し到る能はず。我が前にあるものゝ眞偽を之れによりて斷する能はざる也。それ文體はやがて筆者の人格に非ずや文の精

神に非ずや。形に囚へられて精神を見得ざるの讀文者何すれぞ世に多き。夫の欲性主義を唱ふるものゝ文辭中、最も有力と目せらるるもの即ち最も矯飾の文なることを感ぜざるか。吾人此の種の文に對して常に思ふ。一讀して化せらるるが如し。再讀して即ち矯飾の氣を感じ、卒讀して靜に思念するとき、人格の眼前に髣髴たるを覺ゆ。少なくとも我等を動かすの文は必ず眞なるべし一なるべし。寸毫の偽を容れざるなり。

論緒少しく前にかへりて、彼等が欲性主義推諷の理由を世の個性の無視にありといふ中には、實に獨逸の國家、露西亞の國家といふよりも一層多き意義を有す。即ち夫の感情非認主義の道徳に反動すといふなり。されども今日の歐洲は事實に於いて感情非認主義の道徳が支配する所にあらず。偏狹なる獻身主義や、禁欲主義や今日の

道徳界に弊となる程の地步を占めたるものに非ず。寧ろ欲性の勃興は早く既に之れを破り去りたるにあらずや。今日の歐洲が獻身主義、禁欲主義の抑壓に苦むとは何人の觀察なりや。獻身主義破れ、禁欲主義破れて、獻身主義禁欲主義ならぬものすら是認するを得ざるの獸欲社會の裏面に横行し、而して尙ほ或る自由を此の上を得んとするは今日の實勢なり。されば今日に欲性主義を唱ふるは、反動にあらずして同意なり、代表なり。むしろ一世の獸欲に媚びて黨與を此に求めんとするものなり。公平に之れを思へ、今日の社會に一層欲性の自由を加ふることが、更に幸福なる時勢を生むべしとは何人か斷言し得るぞ。此の理、曩に馬骨人言の記者が事例を擧げ文書に參照し論破して遺憾なかりしにも拘らず、狡猾なるものは辭を設けて、之れと争ふを避け、迂愚なるものは己れ之れと同一の結論に陥

りながら、白面の身を以て之れを漫罵し去らんとせり。之れを要するに如上の範圍に於いて、何れの點に欲性主義が現下の道徳頹廢に反動して一層幸福なる社會を豫期すべき事實ありや、根據ありや。辯せんとするものは明白なる答へを與へよ。

更に欲性主義の主張者に見よ。彼等の書と文とは個性欲の敵として常に在來の社會國家と道徳宗教とを指摘するのみならず進んで其の根本を拒斥せんとせり。即ち上來しばしばいふ所の理性の拒絶是れなり。茲に理性といふ語を用ふるは、カント哲學の理性の意に於いてするものと、單に知識性といふ義に於いてするものと、二義を兼ねたりと見て可なり。此の二者を連続せしむる吾人の見解に異議を挾むものありとも、其は今の場合に無用の論たり、何とならば、欲性論者は明かに道徳を斥け、知識を斥け、併せて道徳の大源たる一

種の非個性欲的意識をも斥くるものなればなり。斯くして欲性論者は理性を斥く、彼等往々にして他の論詰にあふや、彼等の慣用手段たる兩端模稜の辭を弄して、本體の曝露を避けんとすれども、彼等若し欲性の中に一分たりとも理性の混入を許すが如きことを明言せば、立地に其の説の他の部分は自殺し去ることを覺悟せざるべからず。社會の中より個人を取り個人の中より自性欲を取り而して之れを進化的相對的に見ずして絶對的に見たるの彼等は、如何に辭を弄するも此の域外に一步をも移すを得ず、移すは即ち自滅なることを覺悟せざるべからず。

彼等の本領すでに欲性を煽動して理性を呵斥するの一點に集まりとせば、而して是れ彼等の信仰なり、結論なり、主義なりといはば、而して彼等の慣用語として體達實踐の外を許さずといはば、此に吾人

の要求する所は説者の速かに之れを實行して世に示さんことなり。何故に彼等は喋々の辯をのみ事として速かに之れを體現せざるや。人格若しくは天才の感化が人生の最大勢力なることは、彼等の最も善く知りて最も之れを説くを好む所なり。何故に彼等は其の美しき道徳觀を實踐せざるや。社會の組織之れを沮むといふか。善し。社會の之れを沮まざる部面に於てせよ。日本は幸にして未だ有妻の男子が女を容るゝを禁ぜざるなり。所謂佳人の歡會なるものを妻子の前に於いて恣まゝにし見よ。而して其の結果を採りて天下に布けよ。在來の道徳が之れを非難することあるも彼等に取りては固より何の痛痒をも感ぜざるべき也。或は妻子を有するの制度既に非なりといふか。何ぞ速かに之れを去らざるや。而して欲性の狂ふ所更に一女と姦し二女と姦すとせよ。狂人ならざる限り其の

結果は想像し得べきのみ。彼等何ぞ速かに之れを體現して濟世の大願を成せんとせざるや。若し之れを爲すの勇なしといはゞ、卑怯漢なり。之れを爲すまでの信仰なしといはゞ、信仰ありげに天下に壯語せるもの偽に非らずや。

由來我等の疑ふ所は、彼等眞に欲性一面の外に何の聲をも心内に聞くことなく、欲性の満足する所絶えて反對の苦痛を感ぜざる所謂解脱の境を實證したりや否といふことなり。彼等の言を聞くときは、彼等は知識思念によらず實證によりて此の境に入れるものゝ如し。世人は公平に觀察して何と判断するぞ。我等は其の眞の證語ならんことを望むものなりといへども、若し未だ解脱の境に入らず依然として兩元の矛盾に苦みながら、而かも其の一元を壓して他元を立つるの結論を得たるなりといはゞ、是れ直ちに知識ならざるべから



す。唯彼等呆心にして未だ其の知的工風なりしことを自覺し得ざるのみ彼等が好んで用ふる覺醒といふ語は斯くの如き場合にも要あるものなり。若しまた知識にもあらずして尙ほ決断なりといはば茲に彼等は魔術師と成り了せるなり。彼等が淺はかなる誤解を以て天下を瞞過せんとせるなり。孺子僞瞞の途を誤れり。何ぞや。世の所謂體達悟道の語は其の信仰する所に身みづから到り得たるの謂なり。自ら之れに居るが故に寸毫の疑をも容れずといふものなり。疑ひこゝに至りて消ゆるなり疑ひの事實失せたる也。然るに彼等は身未だ欲性自足の境に居る能はず而も知識は更らに與からずして或る不思議なる信仰を空より拈出したるといふ。之れを彼等は稱して體達とも悟入ともいふが如し。若し果たして然りとせば何等の滑稽ぞや、何等の淺薄ぞや。眼をどちて恍惚たりし時忽

然として欲性の満足のみ真也との断定が腦裡に湧出したり彼等此れより不思議に此の断定に信仰を感じたり噫彼等の悟入といひ信仰といふいは實に斯くの如きもの也何ぞそれ世の御夢想といふものに似たるや。禪家の初心者もまた一たびは此くの如き謬見を抱いて隻手の音聲に頭を悩ましたるべし。斯くの如きものを以て主義信仰を天下に呼號せんとは事も愚かや。之れを要する欲性主義者の説眞實體達の信仰ならば速かに之れを體現すべし。否體現し來たらざるを得ざるの理也。天下環視して之れを待たん。若し體達に非ずといはど知識の産物ならざるべからず則ち知識を排するの失言を天下に謝して推理の前に檢断を待つべし。若し知識にも非ずといはど御夢想を悟入と心得るの名を甘んじて其の是非を争ふべし。説者は三様の何れを選ぶか。

説者は遁辭に巧みなるもの也。茲に豫め之れを擧げ置くべし。世の鼠負の徒動もすれば日はく是れ詩也極論すべからずと。説者即ち時としては是れに應じて通路を穿ち抒情の外に何の目的も無しといふが如き態度を示す。されども是れ最も非なり。詩といふを以て架空といふ義とすれば説者が主義鼓吹の文決して架空事にあらず。又詩といふを以て單に抒情の文といふ義とすれば詩といふを以て責を辭するの謂れ少しもあらざるなり。天下に告白して人を動かさんとしたるものは必ず其の責を負はざるべからず。説者また是等はたゞ慨世の餘に出でたる極端の辭なりといふか。世人往々にして此の口實を以て今の場合に擬せんとす。他より之れをいふは罪淺し。説者みづから若し斯くの如くいふとすれば輕薄なり不埒なり。一席の話談に殊さらに激語を用ふるが如きは間

間あるの例なりといへども今の場合は事苟くも主義に關す信仰と號するものに關す彼れが如く人前に言質を立てながら辭屈すれば是れ自らも大中至正と信する所に非すと辯せんか。天下は之れを何と云はん。説者能く斯くの如くなりや否や。或は我れは天下に説くものに非すといはんか。卑怯なる言ひ前なり。既に一旦己が感想を文字に記して天下に公けにする限り天下と其の影響を一にせざるべからざるは言ふまでもなし且つ既に明かに世の人に向かつて醒悟の道を獎説せる限り此の如き口實は一切用を成さざる也。或は以上の批難以外に理を有すれども到底知識を以て述べべからずといふか。恐らく理に非ずして所謂信仰なるべし。體達の信仰か體現すべし。夢想の信仰が此の名を甘諾すべし。説者既に人生

に於いて事を起こせる以上吾人も人生の一員として説者に之れを迫るの権利を有す。

或は説者の懐抱するところ遂に言辭を以て辯すべからずといふか。しばし例に於ける禪家の故智に遁路を求めたるなり。されども禪家の祖は説者よりも賢なりしことを記臆せよ。彼れは始めより不立文字と銘うちたり。説者は何故に喋々の辯を世に公けにして自家の信仰を之れに託したりや。或るときは説法或るときは不説説兩端を持して之れを追へば彼れに遁れ彼れを追へば此れに遁る。黜のぬけ穴といふものに似て笑ふべし。然れども所詮口を噤むといふものは強いて之れを開かしむるに由なし。是れよりしばらく説者に口なきものとして一二を言はんか。説者が慣用の遁辭はなほ多し。説者の説によれば其の説に反する

ものは凡て常に説者を解し得ざるものなり。而してまた説者は常に己れを解し得ざるものと争ふを好まざるものなり。此の種の言の中には如何なる意味ありや説者一人若しくは之れと欲性主義を共にするもの外は天下の人凡て説者を解し得ざるの昧者なり。説者は非常非凡の怪物なり、一代のエニグマなり。噴飯に非ずや。既にみづから自己を一代の題目と自稱する限りは吾人こゝに其の人物の履歴より推して其の人格を想望するも可ならずや。吾人の見る所を以てすれば説者は年未だ三十を多く超えず。世の辛酸風雨をいばかり身にしめたりとも覺えず。而かも彼れは體達悟入の境に入りて我等を隘若たらしめんとす。而して人の之れを疑ふものあれば庭前數尺の觀察下宿屋三年の人生も我れには體達の因縁たるべしといふ。而して同じ人は常に他を罵るとき生ま

若き道學者といふが如き口吻を擬するを好めり。斯くの如きエニ  
グマの人格を世は何と解するぞ。再び噴飯。

また此の人學窓の生活を了へてより數年を出でず。自からは我れ  
豈理を以て争ふ能はざらんやといふと雖も其の理論の言といふも  
のには我等不幸にして甚だ多くの推理を觀取する能はず。而も同  
じ人は一切の智識の價値を否定するの勇氣あるものなり。人は萬  
卷の書をも讀破したる半白の老學究が成れの果てかとも思ふべし。  
三十左右の修業ざかりとは誰れか思はんや。三たび噴飯。

説者はまた一年ばかりの前其の所謂悟りに入りてより所説を一變  
したるものなり。變説は必ずしも不可なかるべし。唯其の悟りの  
因縁を重しとするのみ。夫の自家が便宜によりて豹變を恣にする、  
世の無定見者流といへども時々豹變みな悟りなりといふを得べ

ければ也。説者若し眞の體達豹變ならば其の前期はこれが準備期  
すなはち體に苦悶を感ずるの時ならざるべからず。其の述作に其  
の跡ありや。はた一時の苦悶によりて解脱したりといふか。苦悶  
なくして不思議に解脱したりといふか何れとするも説者の解脱は  
最も怪しむべきものに屬す。そもく説者は議論を得思想を得て

たゞ準備の學説を變じたるものに非ざるか。  
歸する所説者等の分際を以て己れを解せざるものを昧とし體達を  
説いて己れを暗うすると共に智識を輕んじて其の價値を否定する  
は吾人の眼より見るとき僭至上極の沙汰と斷するものなり。  
説者は曾て反對者の言辭輕佻なるが故に答へずといひて一たび難  
詰を遁れたり。また其の言辭匿名なりしが故に答へずといひて二  
たび難詰を遁れたり。小兒輩と争はずといひて三たび難詰を遁れ